



62141



高野大伴

ノタニハク 殺盗ヲ行スル者ハ現ニ衣食ノ利ヲ得人シテ言ハレ
法ヲ違フスルハシノシテ何ノ益カアルト宣ヘリ 砂石集六
右ノコトハ人ヲコロシ盗ナドトシタルホド罪ハナケレバセメテ衣食

又遙ニ皆云々ぬハトウダフセ 海ノ所ヲコトセヌル
筑前ノ海ト云之同レ 但今日本ニ云道ヲ羽ロヒ嵩ス家 武家
平人ニテミラダクヨムルニ 冷泉家トニ条家トナラチハナシ志ヲ
列 定家ニテヨリニ家ニワカレチ今ニミラヨムト云
又遙ニ皆云々ぬハトウダフセ 海ノ所ヲコトセヌル
筑前ノ海ト云之同レ 但今日本ニ云道ヲ羽ロヒ嵩ス家 武家
平人ニテミラダクヨムルニ 冷泉家トニ条家トナラチハナシ志ヲ
列 定家ニテヨリニ家ニワカレチ今ニミラヨムト云

あつねひり

加原令月



是ノ月出雲守也 各々トナル事
ト云ハクスリラセシメルナベシ子ブリテ犬ノ雲ニカカリテ
アリニナルルナル候テ ウタイニ云去来ノウタイニウタイニ
唐ノ淮南國ニテナリ 淮南王ト云 御門ノ子リカキ
ト云一ハヨキヤ 御門ノ子ト云一也コレ云春永ノウタイニ
ウタイニ



心ズノ業ノリ 三ノ國ハんのこらむと
ウミと云里ニ 志ありとPをりや一業
白キ人等々のゆゑのありと
Pのありやこいれや一
山ノ中ニ 志ありとPをりや一業
心ズノ業ノリ 三ノ國ハんのこらむと
ウミと云里ニ 志ありとPをりや一業
白キ人等々のゆゑのありと
Pのありやこいれや一
山ノ中ニ 志ありとPをりや一業



徳アリ佛法ヲソレリ人ヲソレトハ何ノトクカアラシトクト

二〇〇月八三

ト云フハ漢朝ニアル府ノ市ノ中ニ雷ヲケテ人傷メルハス
是ヲ見レハ昔ニ比テ六字アリ皆人不知ケルニ市中ニ利ヲ
ナルアリ文字ノ正ニ對シテハ市中ニ見テ見テ市中用テ
五文字ニテ補之ラニ市中ニケイワキニスラ用フト云テ
雷四封テ罪障可知
右ノ二〇〇月八三ノ字ニタツニ中ニカシリテ見ルニ
此ニ市中用テ

向弥陀ハ

天竺ノ

林圀詔

漢ニハ

無量壽

ト云

砂石集 四

悉曇 天竺ノ文字ヲ
ト云フニ
ト云フニ

子建ハ

ト云フハ唐ニ子建ト云学子文者アリ此子建漢ダクモ
漢ノ学文ヲ多クシツモリ子建ガ学ハハナナリト云フ也
学者也

世ハ

トハ世間ノ者ハ三十酒ノ醉ハトシ我ハヒトリカメルト
ナリククノ下クシレ者ハ唐ノ楚國ノ屈原ト云フ也
イヒレ列楚ノ懷王ノ君臣ニテアリシ也

大公

ガ右

ハ

ハ

ハ

賢人ナリシガハハ賢人ナリテ

美出

ハ

ハ

ハ

ハ

清盛

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

者ナルガ奈言ニ穿人シテ在リ特書ス
右ノ勸学院ハ内裏アリ源氏ノ学文ナリ
又其学院ト云モ在リ是ハ右京ノ学文ナリ

諸

ハ

ハ

ハ

ハ

ハ

員新言老兵詔
荒田不反履
学老少年也
成老
洪深也一角

○なり物しりせそんせらる小ガ子有存
○なり物しりせそんせらる小ガ子有存

○なり物しりせそんせらる小ガ子有存
○なり物しりせそんせらる小ガ子有存

○勅を授けしりせそんせらる小ガ子有存

○なり物しりせそんせらる小ガ子有存

○なり物しりせそんせらる小ガ子有存

○なり物しりせそんせらる小ガ子有存

○送給四月

○なり物しりせそんせらる小ガ子有存

○まの暇のめいり又いり

○なり物しりせそんせらる小ガ子有存

○なり物しりせそんせらる小ガ子有存

○なり物しりせそんせらる小ガ子有存

○源初話ハ五十四巻

○なり物しりせそんせらる小ガ子有存

○腰三三

○なり物しりせそんせらる小ガ子有存

○小式部

○なり物しりせそんせらる小ガ子有存

鬼国丁女崩山ト云山ニ居ル鬼ノ者ヲ
神怒怒背累ト云二人ノ者也

西之七情 一并六淫

凡寒暑湿燥热 是シテソノチ六淫

喜怒憂思悲恐 是七情

宇治松 シカケ物メノ一南都冠真寺ノ及服ト人ノカケ物メラレト今ノ町

春日御作 大抵ケモノエケレシク作リルシ云地産シ作ルノ子ノ故ト云二人地産

春日湯筆 地産ト云ハ書像アリ 是ハ又ケモノアラス春日ノ大宮ノ西又

俱生神 安居ノ屋ト云アリセヨリ西ニ南ノ屋ト云ニ此ヲ僧アリケ屋ハ

メナトシキセシナリ

津右左衛門 ト云ハ維摩居士ノ一ハ木士ト云木士ト云ハ昔世陸ト云

鳩摩羅什 世ノ無言学ノ一 天生ノ摩鳩羅三蔵優填王ノ梅檀ノ像ヲ買テ

留メ亦不智ノ種ヲツカントテ王ノ女ヲ合テ羅什ニ花

相アリト云成長ノ後先師ノ本意シテ遊トテ後像ヲ注ト云

此成レシト云成長ノ後先師ノ本意シテ遊トテ後像ヲ注ト云

此成レシト云成長ノ後先師ノ本意シテ遊トテ後像ヲ注ト云

此成レシト云成長ノ後先師ノ本意シテ遊トテ後像ヲ注ト云

唐二海ノ在カキ事此右ラヒニトスヒシノハ字ナメヤ草麻子

唐ガニノオヲソノミ、ウリヲ座ノ侍ヨチノワリガルニ足ノタラ、
付ルニ七日ハヨナノワリガルニソノミ、ワルニモノ、
中風ニ氣ナトノ人ツジ、ロナトカムニカニ又方ノ手ノ回、
ヲライナトノヤリナレ物、ヨリヲ入テモ、あノヒニキ、シテ五ヘシ
見ルヨ、チマシヨ、ト云

貞 加 註
ツルニ、ニハハ、ウ、ヒキ、ハ、ヒ、日、名、ル、カ、ハ、ツ、ル、石、ハ、チ、中、ハ
帟、ス、チ、ニ、ソ、ナ、リ、ノ、ヒ、セ、セ、云、云

朱以事

- 慶長
- 伊勢国
- 山田
- 宇治
- 徳治
- 秀頼
- 赤松公
- 秀忠公
- 右大臣
- 右大臣
- 大成論
- 案病指南
- 論語
- 雜經
- 序例

心 志 誠 悃

河 河ノ字シ、シモ子ルトヨムニ、論言ニテヨム

戒壇 出家ノカイガシラム、侍ノ文、南都東大寺ト、比密山ト、戒壇、

今ハ、南都東大寺ト、比密山ト、ニテ、所、ナ、ラ、チ、ハ、チ、ト、云、
ユレ、ハ、南都東大寺ト、比密山ト、ニテ、所、ナ、ラ、チ、ハ、チ、ト、云、
御行 親王ノアリキ玉ヲ云、法王 親王ニハ、有

御行 親王ノアリキ玉ヲ云、法王 親王ニハ、有

桂 虎 麻 三性ト云テ性ニツアリ 桂 虎 麻、
桂ハ、ウ、ラ、虎ハ、ウ、ナ、ギ、麻ハ、ヒ、キ、カ、イ、ル、依、テ、月、

海ニ、ウ、カ、ニ、チ、虎モ、海、ハ、シ、ル、ト、云、是、シ、ル、ト、云、

六畜^{リクケツ} トクハ 雑^カ犬^{イヌ}馬^{ウマ}牛^{ウシ}猪^{ブタ}羊^{ヒツ} 此^{コノ}六^ムツノ^シモ^シ六^ム畜^{トク}也^{ナリ}
 蛇^{ヘビ} 蝮^{クサリ} 蟻^{アリ} 蝮^{クサリ} 蟻^{アリ}
 當^{トウ} 二^ニサ^シ此^{コノ}字^ジヲ^ヲハ^ハテ^テベ^ベレ^レト^トカ^カリ^リて^て目^メ々^々ス^スベ^ベキ^キト^トシ^シク^クリ^リ仕^仕ニ^ニ
 目^メミ^ミタ^タル^ル一^一ク^クヲ^ヲキ^キク^クス^スル^ル一^一ク^クヲ^ヲキ^キク^クス^スル^ル一^一ク^クヲ^ヲキ^キク^クス^スル^ル

點^{テン} ↓
 一^一 ———
 一^一 ———
 一^一 ———
 一^一 ———
 一^一 ———
 一^一 ———
 一^一 ———
 一^一 ———

公方代ニ

等^{トウ}持^チ院^{イン} 爲^ノ氏^シ
 宝^{ホウ}慈^ジ院^{イン} 義^ノ詮^{セン}
 鹿^{ロク}因^{イン}院^{イン} 義^ノ汝^{ニョ}
 勝^{セウ}定^{テイ}院^{イン} 義^ノ持^チ
 長^{チャウ}得^{トク}院^{イン} 義^ノ量^{リヤウ}
 普^フ度^{トク}院^{イン} 義^ノ敷^キ
 慶^{ケイ}雲^{ウン}院^{イン} 義^ノ傍^{ボウ}
 慈^ジ照^{シャウ}院^{イン} 義^ノ政^{テイ}
 常^{チャウ}德^{トク}院^{イン} 義^ノ尚^{シヤウ}
 大^{ダイ}智^チ院^{イン} 義^ノ躬^{コン}

惠^エ林^{リン}院^{イン} 義^ノ枚^{メイ}
 法^{ポフ}任^{ニン}院^{イン} 義^ノ澄^{テイ}
 万^{マン}松^{ソウ}院^{イン} 義^ノ友^{ユウ}
 光^{クワウ}源^{ゲン}院^{イン} 義^ノ輝^{クイ}

令園寺

ト云寺長ヲハハラズ此寺ハ鹿園院ノ御タチ休ト云

四度解

モクシトケナキト云寺ノ文字ハ魚四度解ト書ス

无四度解

ト云コトハ日本ノ世話ニワシカナル證文ナレ殘景抄ノ四解由ノ

如ノ抄初ノ厨东折ニハハハ書リ言ハ物解由ニテ四解ノ等

用ヲ遂ルナリ而一年ニ四度立用ヲ遂ルニ私曲アルハ一度

遂結解アルハ四度ノ等用皆解ナル故ニ四度解トナシ

ニ倍ノモ外正故ニニ解トナシト云

弓長イノカ子七尺二寸シテ弓長ト曰奇ニ云々。唐ハ辟月ノ

骨ノ角ヨリハ凡ヨキニテ。四長シテ弓長ト云

他コシ七尺二寸アルカ

檢^{ケン}字^ジカ^カイ^イ

檢^{ケン}字^ジカ^カイ^イノ字^ジ痛^ツシ^シル^ルハ^ハト^トニ^ニ時^シノ^ノ字^ジ長^チシ^シ。檢^{ケン}和^ワ初^{ハツ}シ^シケン^{ケン}ケ^ケ各^{ガク}時^ジノ^ノケン^{ケン}字^ジ也

論語^ロニ^ニ第^ニ二^ニ為^ニ政^ニノ^ノ篇^ニ也^ニ

十有五而志於学ト云ハ孔子ハ十五ノ年ヨリ学子文ノ

志^シシ^シフ^フカ^カク^クメ^メ学^{ガク}子^シ文^シ心^シヲ^ヲ入^ルル^ルハ^ハ孔子^ノハ^ハ聖^ノ人^{ナリ}ナ^リト

十五ヨリ内カラ学子文ノ志アルハ凡人^ニ其心ナラズヤク

ツトメヨト云心ナリ故我年十五ラメ志学子文ト云ハリ

昂^ノナ^リト云ハ成^ル意^トトテ人トナル者^ニスナハテ志^シ学^{ガク}

ノ年ト云ハ人ナメ歳ノ一^ト也

三十而立トハ十五ヨリ三務ニテ十五年ノ間五経ノ学子文ニ志ト

テ立^ルト云ハ学^{ガク}子^シ文^シニ^ニ志^スル^ルト云^フハ五^ノ経^ノノ^ノ学^{ガク}子^シ文^シト云^フハ

クキ^クラ^ラメ^メテ^テ人^ノノ^ノ子^シ文^シヲ^ヲヤ^ヤト^ト名^ナラ^ラズ^ズト云^フハ立^ルテ^テラ^ルル^ル也

罕而不惑ト云ハ学子文ニ志テヨリ四十ニテナ年ノ善ノ書^ノ籍^ノヲ

見^ルテ^テモ^モト^トト^ト人^ノノ^ノ善^ノ惡^ノヲ^ヲシ^シキ^キナ^ララ^ラカ^カ故^ニ何^レヲ^ヲ見^ル

テ^テモ^モツ^ツラ^ラシ^シト^ト心^ノニ^ニト^トウ^ウ一^トナ^ラカ^カラ^ラメ^メナ^ラレ^レト^ト云^フ

五十而知天命。トハ三十三ノ学文成就シ四書五經ノハキウヘ文

五務ニテハ廿五年ノアヲ美シノ書ヲモ見或ハ万人
言語ノ虚説ヲ福福ノ盛衰一カヲ一カヲ證ミ
ナシテ了知ス故人ハ皆賢愚貧富福寿命
天ノ命リズル如クニル一五ナシノアキラムサトルト也

六十而耳順

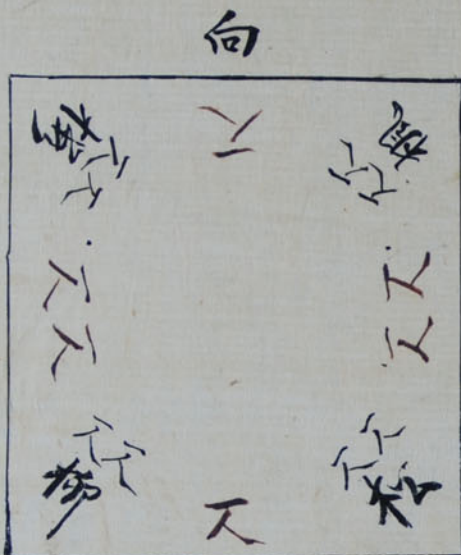
トハ人ノ云フヲ聞テ不違ナリ云コハ学文知明ノ
ニニ年トナチニナルニテ多ノ一ツツカ故ニ人何
コト云ハクソレサモアラシ我モ昔サマウク一ツツカリト
云ツイニ耳ニモル一ナキカ故

七十而随心所欲不逾矩

トハ智明ナルニ七務年ノ向ナラヒツ
トノ多ク一ツツカキ人ノ作法ヲシルカ故ニ七十ヲ身ハ
クモレシ心モクモレシ身ヲモレシニモチ心ノモレタチフル
コトハ法度モレタルルニイシハセ又モノナリトハ八十ノ一ナキハ
孔子七十ニ歳ニテ死シ終ノユエニモレナシト也

○蹴鞠場

。雨ヲチヨリ向ヘ七間半服(モ同レ)ニ懸ハセレホドノ場ニレナル故ニ
五ノ五ヲモ大葉ヨレ忽ノ高リハ五尺ノモノハ忽ノ本ハ
柳極松楓



向

又形

。赏教ノ人松左ニ立テ楓ノ左ニ立コレテ正分ノ相手ト云テ
以テ人柳ノ右ニ立テ楓ノ右ニ立コレモ正分ノ相手ト云
以テ追テ又松ノ左ヨリ柳ノ右ヲ一ツツカスラテ今ト云

ナレ向ニテ故めけち之律皆同シ庭ニ有ハ境ヲ有兩分ト云フ
西分ハ昂正分以分ハ境ハ昂八人ノ境ハ八人諾ノ
離鞠

六人諾ノ時ハ物ノ真中ニ人賞然ノ人立ニモ以テ向ノ真中
一人ニ以テ柳樹ノ有ニ人于以ニ松楓ノ有ニ人立テ即朱ノ

人ノ如シ
ニリテ入ルハ餘ノ人モケテ形ノ真中ヨリコロクトコロハカシ入ニ入テ
真中ニテ行テ入ルモノ

アゲテリハ八人諾ノ時ハ物ノ先トツチヲ胸メケホトケアケサチ
セイタケホトケアケサチニツメシセイダケヨリサシタケケエテモ
ケカケテ居ス

木越ト云ハ松ハ松柳ハ柳ノ本ニ居ル人本ノ本ニテ他人ノ方ハ
ホテケルヲ本都ト云々後ヨリ廻リテケルヲハ不若ト云々
もしモ中一出テハ不若ト云々本ノ本ニテノ一

右ノ足ヲカシホシテ居ルシタテ是ト云々是足シキラフカ左ノ
是シカシ出ノ居モノソシテハケヤスエト云々

六人諾ノ時モ作は日向ノ人アケニリシケル
忽ニ皆松ト云一列ノ子幼ナレモ七々々ノ忽ニ皆松ヲ植玉フヨリ
位ニテナケルハ

植ヌサト云々位ト云一ナレ柳樹松楓トウ
ニハヨリコトメキ物カタキエエニ大ガイ松ハカリウユルハ大方両改
ノ松ヲウヘテヨレ兩角ニシマタギテヨレ

又忽ニ四本カカリ竹ヲサス一ハ寸ノ用ニ切ミト云テ竹ニ三重
カス重ク枝シウケテ長ケ一丈三尺カ四尺ニギリテツルハサキ
ソギキリニキルアレノコギリニテキリト云モノハ自然ニリテヨリ

ヲチカリテツキツラヌンアリ其用ニシト云

的場ハ弓枝女一枝モノ之然レコラ村ル人ニシテ今ハナ六枝或ハ

孔子
モナハ枝ニスルハ
ハ老子ヨリハ人ハ
孔子ノ同ニテ

孔子ノ同ニテ

轉述ハ今まんニ抄ケテ立多キニアニルトニ
元和元年ニ

孝百存不傷返謂孝始

智者不惑
ト云ハ知ヲ云トハヨクモフヲ知タル人ノ一ナリ知智直ツヤク相ッ
レリタルカ故ニ何トクニトニヤヨフ一ナリト

仁者不憂
トハ仁者ト云ハエシアカメトシナウケアニスルシ云ハ言ハ老タルヲ
敬ニ若キ人ヲ愛シ智ヲシタウトロ思老シ慮リ
トトニカカハス人ノ民ヲムサホラス富シモウラヤニス令ルシキモ
不憂ナリ故ニトシキ人ハカサシキ一シモカサシニスラレ
シキ一シモヨロコバヌシタルニ依テラシエタノニナル

勇者不懼
トハ勇者ト云ハケナゲナル武勇老シ云ナリ言ハ知慧ニ文字
モナリ分別を慮ナクメ心猛リ生レ名人ハ何ドモモシ
ソレナルナリ故ニ智未ハ勇者アラスト云下ナルナリ

八幡家トリハ

二条院

仁智の御家

門前トリハ

花院

平院

三善寺別當

大宮院

三善寺別當

一休院

九條院

東山ノ大ニテル家

善道院

西湯院

下川院

三善寺別當

一条院

定通寺長連院 眼門の

淨土寺の 日

淨成院 日

淨光寺の 日 今高宗ノ

淨光家ノ

淨光院の

久我カガ 院の

西園寺の

西園寺の

花山院の

大徳寺の

淨院の

淨光寺の

大方以義家ノト也打計外ニ天ノをテ成ル
十数大長ノ官ト妙始リ

○雞徒ハ 秦ノ扁鵲ノ作也 註ハ勿聽子ノ作ル百廿六年ニテ

○内経ハ 黄帝ト岐伯トノ論ハ但ク岐伯ハ海山ト云山ノ行又トニ

他ノ處ト後九ニテ二千三十年ニテハ此ノ初ノ子トナリトクノ
人ノ月ハ處ト後九ノ正ノ身ハ公ニ作ルトテノ處ト在ルト

○天織冠 十三年ノ八月テハ人ノ力ノリレニルトク

○平徳太子 乙未年ノ初ノ十日ニテ云ハ但ハ唐ノ長ノ天ノ年トナリ

○吉備大臣ハ聖武天皇ノ臣下ニ唐ノ使リニテ野馬ノ宮ニ

ヨミ又朝ニモウツシカリ下之此野馬室ハ寶誌和尚ノ作也此寶誌和尚ハ漢武帝ノ侍代ノ人ニ千百年前ノ正人ニ以侍代ニ何事ヲテ宗新ナレシカレ侍代ニ書道亦同セノ人ニ

○年号オカカリコシモ此寶誌和尚ノ作也

但云云十八年

○衣道非ハイニテウ天皇ノ臣ニ千三百年ニナルトシ

○中將非ハ九百年ニナルト云ヨコギノ石名ガムス

○心神天皇ニテカキ年ニナルト云 他是ハ唐皇十九年ナリ

○難波ノ系ト云ハ今大坂ノ城ノ所ノ山ニ三友如立ノ山ニ云

○奈良ヨリ平安城ハ京ノラツル事ウツリモカキ年ニナルト云

○又寸脈六分関脈六分モトニカ入寸寸内是陽得寸

他けい長十八年ナリ

内九分陽数也 尺内七分関下三分入寸 尺内是陰得寸 得尺内一寸陰数ナリ終如一寸九分比也 右今醫鑑

○金九集ト 察病指南トニ 二寸五分ト云リ也カ
○難經ト 古今醫鑑トニ 一寸九分ト云リ也カ

○御室ノ御下

ト云ハ宇多御門ト初リケル其子細ハ天皇言ノ宗ト弘法大師ニお侍メテ太子ノ御イカシト云ニ世ヲ傳ニ至テ後御室ノ御下ラ京ノ山ニ仁和寺ト云テ御建立アリケリタルト云ノ御室ノ御下ト云テ初メシリ此宇多天皇ハ弘法ノ太子ノ今ニテ六百四十年ニナルギト云 他元和二年ニテ

○醍醐ノ天皇ト云モ

二慶ワリをノ千ハ後醍醐ノ天皇ト云此後ノ醍醐ノ天皇時ト云平乱ノ乱初レリシカレハ此醍醐天皇ハハシメノ醍醐ノ天皇ヨク似ルル依テ後醍醐ト名付ク一後有カソキニ皇ニテ日本國中ヲ年トシホシメシ

傳教大原ハ此叡山ノ名家ナリシカ合ハトネーシスイレキ一チ安樂ノノロシ

シランノ地ガク極樂ヲ繪書テ示シテラ 汪念尺チソシヨフトカク世ニ

シハル一火ツミトツモヒテトシ浄土字ト云一ハジレリ 唐ヨリ傳リタ

宗ラミアラズ人美若ヨリカキニ 大旨ト云テ 知息院ノウラニカリ

ソコニツ居ス

石榴

ト云ニ付テ 榴トガリ云ガビヤク白ノミシ名ニ 安石園ト云
國ヨリ傳リケルニ依テ 石榴ト云タトハシシクタイヨシト云カメニ
カクハト云ハをヨシビヤク名ト云テモカクコトアラズ

穴賢

ト云ハ昔ハ天ヨリ 穴ト云世傳リテ人ヲクヒケルニ皆人
アナシメ家トメハイ入テ兵又ルニタガヒノ刃迄ナトニ何ノメ
ナクアナニシワスルカナト云キ一アナヲカシコクニタリト云テ
メデタキ一ノトメシハリニ今ノ世ミアナカレコトムルコノ故ニ

白朮

トシロキモシ人ガトニ云カタコト

白朮ト云ヨシ

磁石

東海ノ磁石山ト云山ヨリ
東トイハレ日本ニモ有リ

此磁石ト云モノハニツ海ニアルモノニシカレ長日ノハツクシトレノ

國ヤラニ山アリシニウシ流モトキナル石ナリシニアル侍ワニ人

ヤニ一約シ時ユレニアリシナメシ又キモセアルト知テ今ノウニホトナル石ドリ

ツキテチナリシニフシキヤトウハトスレトシカリニニテ是地ニ宿カリテ

石ニナメラトラシテニゲリト云ニ皆人定ニ磁石ナルニトテトクテ今ノ世モ

ウクカイスルハコレナリ又ニ其時 鉄ナタハチナトニテハトレカリニ別ナ

石ヲトトリシトシテ此アニクカレシハ鉄シスニト云ハ其年オトの年ノノ

鐵

ノチガイハ 鐵ハカシラ四カクニ今ハカレラ丸シマシムテニ交

カハルト

磁石トモ書ニ
鐵桃

○和漢胡語集ハ公位ト云人ノ作シヨソニテナルト云初メハ
 在阴派ト名ノ又胡語ノチシムカシヨリニ流アリ 綾小路流ト云ト
 フリモハ胡語ノ本註ニ「ニアラスメ、チノ」ナリ但トツケカヒナリト云

○佛法之「」シ書ス

○合掌又手稱ニ 南无阿弥陀仏

○三心四修ト云 三心ハ安心也 四修ハ起行五念行作業 起行正念作業ト云
 ○阿弥陀ハ天竺ノ梵語 漢ニ 無量寿ト云 石集四

○一向宗系口

親書 若月廿日 如伝 骨骨 覚如 正月廿日 綽如 卯月廿日
 巧如 十月廿日 若如 二月廿日 存如 六月廿日 蓮如 三月廿日
 實如 二月廿日 證如 八月廿日 教如 本門夜
 螺髻 云ナリ同「」ソ

四聖 阿弥陀釈迦牟尼觀音サト云

新・阿難 迦葉 目連
ハシメテ書カレシ
ハシメテ書カレシ

大神宮前三宝異名・社壇ヲハ經シモアラハモツス三宝ノ名ヲモツレカニ

イハス佛ヲハ立スクミ經ヲハ津紙僧ヲハ髮長
堂ヲハコリタキオトイフトク石集一

内宮外宮兩部大日

●大海ノ底ノ大日ノ印文ヨリ妻ヲコリテ内宮外
宮ハ兩部ノ大日トコソ習侍ヲ侍。内宮ハ胎藏界ノ香
外宮ハ金剛界ノ大日

天岩戸

ト云ハ都卒天ノタカニ系ト云アリ 日一

大神宮物忌度

●餘社ニスコシカガリテ侍リ産屋ヲハ生氣ト申ス又十日
忌又ニ死セルラモ死氣トテ同五十日忌後ニテ故
死ハ生ヨリ来リ生ハ是死ノ始ニサレハ生死ヲ告ニ
忌ニレトコソ申侍侍ク石集一

东福寺

用山布一國ノ死日ナ月ナ百ニシカルニ依テ十月廿
初日ノ交割物出ルト交割ノ日白衣ノ觀者又
五方所送下五々是ハ鬼殿司ト云人東福寺ノ寺中
アリ是仁ハ唐ノ所ノ物也ツカヒマワシ物メ白衣ノ
觀者ハ五方所送トカレシト云兵外東福寺ニ於テ大方
持鬼殿司書スト又山門ノ末所送トカレシアリコレモ
ナイスキ物ニ此アリスキモ同人ト云涅槃像モ日人
カレハ涅槃像アリ此涅槃像ハ右ノ東福寺ノヨリモ
五尺大キニシテリマ侍ヤケテ今ハ云々此物ハ物也
家ノ者書ケルト云ツレニ付テ涅槃像ノ物ニ多ク方字本
ニテモ釋迦ノ御死ヲ知テカレシト世云云付テ云ウレ
書クル字ハナリニテカレシル御書ケルト云コレハトテナルト
本中ニル右ニト

建仁寺

大キナル物アリ曼荼羅ノ令堂何モカレト云此
此物ハ曼荼羅ノ相入道清盛ニカレト云此
曼荼羅ノ相入道清盛ニカレト云此
曼荼羅ノ相入道清盛ニカレト云此

高野

イハ令堂も云キアル云々高野ノ向東ニカレリ云々

○鏡足カミメリハ天智八年ニ薨ス
大織冠オホオリ

○待教マテノタカ法入唐ハ桓武延暦九三年キリ

○空海クウカイ大伴位 嵯峨弘仁十年

○空海入定 仁明兼和二年

○古今集 延喜五年 文治二年

○十戒集 二年

○大和ノ初津ノ觀音ハ羽津大御言左ノ川ノ人海ノ島ノ川ノヤウ
アリ三千石ノ入道ハ羽津大御言ト云ハ大和古御言也

○高野ノウツヤウハ大岡北ノアツガレ休ハ二万七千石入
大岡北ノウツヤウ

○大佛ハ同大岡北ノアツガレ休ニ万六千石入三千石

○玄奘ソウエン僧都ハ桑良ノ真福寺ノ住僧ナリシカウキセシイハ

三徳山ノシクニ住マレテ吾ラレシニミナ人ミナト学ノ道ヲシクニテ
鐵田テツタ新ノ湯川ト云所ゾユカレケル右三徳住僧ニ任セラレシ

時高タカ市原イチハラノ大御言カヌメニ命カレ三徳ノ御林ヨルノ
カヨヒ玉ヒテスデニ赤子ヲウムコレハ命カレ物ガナリ吾時ノ

クルミシシを宿 僧都 皇中ニガクアラハシケルカレハ後女
山カクシテ今ノ三帝ノシタイニハ西神ノゴトクニウタウ非
又高市原ノ大御言ハ重仁天王ノ時代ノ人ニ玄宿僧都ハ

送戦ノ天王時ノ人ニ重仁ヨリ送戦ニ天ノ間ケ年アリ又玄宿
今ニテニ七百年迄トク
身御寺ノ寶物ノ三ツノ文字ハ 羅奢待。面句不肖玉

。泗濱石 三ツノ文字ハ

。大和國吉野ノ菟王狩現ハ 伊弉波ハ 弥勒ト云又夜御寺ノ

日藏ト云人イノリレハ此山ノ守護ニナラントシホシメス伊弉波イテサセタ
ニエト行シニ施陀ノイデ玉フニ御スガタニテハイカトシイカニスニ
ムニ地蔵ノスガタニテ出モラニ又シツカニス赤ニ赤ニ今ノ吉野ノ菟王
春日ノ社アリ 一社ハ伊弉波 一社ハ石清久 一社ハ
香丸ニ

。カシニカトリノ文字ハ麻吹。香丸ニシテ今ノ吉野ノ菟王ノ社ニカトリトハスル
ニイノラレナリ 實ハヤトリ

。右ニシテ吉野ノ菟王才ニ由ル時ノ地蔵ハ 德自ノ西タイセンノ
地蔵是ナリ 一社ハ伯耆國ノ菟王ト云

。三帝ノエニギシ信也ヨクツツクリナシニタニトトカレシニ昔方
アルエニギナニ信レシズアトカキ氏ナキアアルニ信チツクリモ
ナラズモキシカレシト信也ヨクニカルヨクノトツチキ
玉トトキケラレ今ハニセヌト

。正統礼 ト云モラブリ

仲哀崩ス 皇后イキトシリニシテ七月アリテ別カシ
作リイモホリコモラセ給 此時應神天皇ハラニサセ
ミシケリキカリサシハ 道ヲシ給ハ

七味

梁武帝 發傷七情問業誌云和尙謀公答云

百病自氣生氣生心息心息生法上慧心息
相應氣痛天隨土不可能分不可作而存分

潮熱往來惡寒胸膈痞滿心氣甚矣診腎
命門之脈不可先證少慮於耳煩腎邪氣之

方之除煩也 七野 堪忍 五兩 分別 七支 遠色
遠辭 截斷 無用 三兩

右月既明乃清淨乃為一長浸以知是火焙之

細持以慈悲心和合為丸晝夜服用三年乃得
養生之速懷發加一分一倍若存分發加廿
月一倍短氣起加埋息一倍膜志發加遠度
五分則一倍亦不發加利根五分則一倍發
執意加善知識法也 意莫執着可也 不愈
和尙捧武帝得謀之教化止而逆致生非
道天下為之

右寶志和尙作之野馬堂之月此仁作之

了悟 个只少名非一身也

イビイシニラニテニムグアアリ
ハチニテスリクモチ
ム子ニニモヨツニヨシ

○光原氏トハ延喜御ウシ
御見オシト云人ト云

○赤井長久保知我
不奪境法路由

○直躰
百信脚取

一休叟字燭

カクノコトクニシ
カクノコトクニシ

○赤井長久保知我
不奪境法路由

○直躰
百信脚取

一休叟字燭

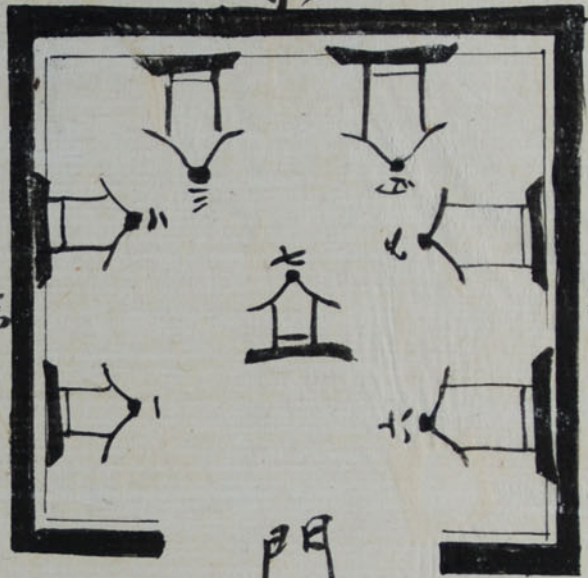
カクノコトクニシ
カクノコトクニシ

○赤井長久保知我
不奪境法路由

江口ノシタイニ
ウタシロクニ
カクノコトクニシ

宗廟

廣徳廟



○本セツノ廟ハ、久し程ヨリ親西ニシテ七代一二三ノ如クニナラズ子忌日ニ

コレヲ祭ルハツハ立ツルナレハツダレハ廣徳廟ヲセツシヒトツニツキフム
八代メシバ別ニツヅルハ、此ノイク代モ此レ

○名ハ今日ノ卯塔ニ似タリトシ然今日亦云卯塔バイカ
唐ノハトリノカイヨゴトクニ右ニテ切テ立ルハ今方塔ニ云卯ノ字ハカイ
ガト云字也カイゴナリニスルカユヘニランタト云ハ此
日中ニ卯塔ハ四九院ハ四九院ハ一ニランタフハ一ニ

○五方ノフクラノ内シバチアラト云ハ
小鼓ノ内ノ中ホソキ所ヲシヨト云ハ

心善雷

ト云ノ硬ノ者ノ日平ノ者約ニタカキ候ニテ...

尾州ノ熱田

湯ノ化ニ湯ノ更ト云テ未社アリ...

八重ノ劔

ノハツクウノ大蛇ノ...

お市ノ国

ノハツクウノ大蛇ノ...

八重ノ劔

ノハツクウノ大蛇ノ...

宇治川よりや海へはし行の凡そつゞの松の夕ぐれ
 けりやうきまのうねのちを舟よりかきやうきまの月を
 らやうきまの舟をうねの舟の目しる花はうきまのうね
 らうきまの舟をうねの舟の目しる花はうきまのうね
 けりやうきまの舟をうねの舟の目しる花はうきまのうね
 けりやうきまの舟をうねの舟の目しる花はうきまのうね

孟中季ノイ孟中季トスハ 孟春中春季春四季
 トモ三月之役正月ハ孟二月ハ中 三月ハ季ノトク

京大文字屋ノ世ノホセキ今子午ノ音取ノ以具也

世路多^ハ減^ハ 信天^ヲ行直道

無^シ思^フ不^ト研^ク窮^ク 休^ム問^フ馬^ノ朱^ノ凡^ク

平生見^ル諸^ノ老^シ 日本^ニ照^シ禪^者

今日自^ラ成^ル翁^ト 欲^シ得^ル教^ノ字^ヲ

認^ル字^ノ眼^ヲ指^シ館^ニ 以^テ述^ス稟^ノ賜^ヲ之^ヲ

強^ク譯^シ身^ノ尚^ク華^ニ 摩^ク量^ノ叟^ノ知^ル是^ヲ

書

政事ニハ 丹有子路 文学ニハ 子游 子夏 公冶長ノ人ニ此十人ノ列
 孔子ノナ哲ノ才子云ニ今人ノカニラト云
 德行ノハハフシトシノ徳ニアラヌタ、人五常ノ徳ヲ云トイヘ
 言信ノハハカクモニ内ノ誦ヲ云ニ云云ト云手先ニ依テ言信ニト云タリ
 政事ノハハクニシリノシヨクシヨクニカスレトイヘ
 文学ノハハクニシリノシヨクシヨクニカスレトイヘ
 剛毅未訥ノ訥ノ字トモソノイヘ

素若多神知我石奪人奪

鏡後蹤由須存百信

脚部一々一林

直：端系以景上比

一体更系順

今度為行相市上糸敷口都一室河同公年之刺見
 物此軍人共沙翁翁月之統中先子秀叔下
 石田中物送心く物只住進夢局信國尔之物翁
 物与美作國書此公我討掃願中箇回回此軍現
 進拂遂中今早生指石田此安國寺本深事
 家康守統之取辱只到秀叔二河果此及
 大岡恭恩只上忠端之有常也此此也之念

後報也蠅蛇以新白流車假令一紙張信細字
 唐突傷之雖心沙マ馬堂及物俾者以時痛
 為秀叔首切之之の鐘物痛痛之

津國古物城主
秀叔云々

武義四口之將軍
秀叔

清心

芳里考之極見山以作都難題之執少
 席作割二取川之之之之之而大岡秀叔及
 十五歳二日後五下五日分法仍仍投道都此中

年之五坊知先子石田路只一身之志心雖
 覆天下依之運之運切其兵攻國今乃云其見
 秀乳運而所云云云何故其為知如別心其得
 高唐表真不約古代之國休何如之國且其恩
 秀乳之荒約一國孤如之其是也此為一國
 一城之川流脈切之其力能上物得着
 國白町之及自地其佛神三寶物之者
 將軍及子高在平危矣之其物之數其
 以之將軍中其平家康之

石田路只

高唐表真

面目

〇此中弟子村中右之其外ノ其業也ヤノ其業ノ目レ其
 其業アリ一也一也ノ其業也三ト云之

于三ノ

らうかきノ勢ハ六月二十七日ハ水害ハ
土丹由路ニ名ルルハ一ノハガ高クナリ

一午ノ年ハ二月廿五日ハ水害ハ

九月廿二日ハ水害ハ高クナリ

南ノ方ニ水害ハ高クナリ

一未ノ年ハ三月廿五日ハ水害ハ

九月廿二日ハ水害ハ高クナリ

南ノ方ニ水害ハ高クナリ

一申ノ年ハ三月廿五日ハ水害ハ

九月廿二日ハ水害ハ高クナリ

ハ高クナリ

一酉ノ年ハ三月廿五日ハ水害ハ

九月廿二日ハ水害ハ高クナリ

一戌ノ年ハ三月廿五日ハ水害ハ

九月廿二日ハ水害ハ高クナリ

一亥ノ年ハ三月廿五日ハ水害ハ

九月廿二日ハ水害ハ高クナリ

多ク死スル日ハ六月廿五日ハ

多ク死スル日ハ六月廿五日ハ

法念上人ニ於教情ノ和

○モロコシ我朝モロコシノ下戸タチノ一モアラス又カチシクヒテ
素シ香テ香丸酒モアラス一ウタガヒナリ性生ス
以ハトリテ一壺香丸分外ノ子細作ワズ但三教四種
者ナトトトモノ他ハ世宗モ史官ノムウラキ民者
モトメキトコノ一休シケレ
大盛ニ号ノ一女性ヲ失也
一夫之者ノゾジ身ヲ下トモ常ニ振舞セテ只
一而ハ内シ香ベシ

シラノヤシ
吐ケ^{トク}禪^{ゼン}門^{モン}手^テ情^{セイ}多^タ狡^{カウ}足^{ソク}
池^チ碓^ヅ石^シ列^{レツ}一^{イチ}味^ミ天^{テン}然^{ゼン}割^{カク}一^{イチ}体^{テイ}

○唐ニ達戸ノ記ヲ付テツグ道ヲヨリ六代メ北京神秀ナラシトテ著語ニ此善提本
是樹明鏡在臺時ト勤拂拭莫令意塵埃ト云フシテカニ書レ

著語

○善提本是樹
時ト勤拂拭

明鏡亦在臺
莫令意塵埃

此亦又カトノ所ノ御申

○北京神秀右ノ著語ヲカニ書ニ慧徳禪師列皮カニシ枝此善提本非的鏡亦
是臺本末一物何所有塵埃ト云語シ書付ルニコレニシノ語ニ付テ
神秀ハサ入祖ノ弘忍行所ノ才成レカト語付テ後六祖ノエテ禪師ノ
一才子ナリト云

○善提本非樹
本末一物

何所有塵埃

六祖

○右ヨリ六祖ト云テ達戸ヨリ六代メシツグ五代メシ弘忍禪師ト云シ弘忍ノ一才子
北京神秀ト云人アリレニ志学セタリ此神秀ニ世ヲ傳シツカセトテナリクナリレニ著語

右ノ善提本是樹ヲカニ書テキヤンチニガケレニ慧徳禪師ハ其比ハ五代メノ弘忍禪
師ノ意米ヲフミ意子ナトヲ云テ居タリレ被カニシラシ枝善提本非樹

諸ヲ書タリシニ五祖弘忍禪師是ヲ見テ慧思法禪師ニ六祖ヲツケシトナリ
 達ノノ今トテ五代メニチツタヘタルシテ六祖ニ後コレニ神秀ノ才子氏マレ
 ニチトテウバウシトセシニシテニゲルニシイツケテトラントセシニセシカタナカニ
 然レトモ五
 ケルニ彼シワヘケル才子氏列ニシトセシニ
 吾拈本是樹 明鏡亦有臺ト云ハ
 吾拈ハウチノコトシニ明鏡亦有
 臺トハアキラカガニミカケタルト
 時勤拂拭 時ニシヤリトキミガクヘト云
 莫令惹惹塵埃トハ
 喜拈本非樹 トハ
 明鏡亦在臺 トハ
 本非一物 トハ
 何所有塵埃トハ

○六祖ノ一
 初祖達摩大師
 二祖 慧可大師
 三祖 僧璨大師
 四祖 道信禪師
 五祖 弘忍禪師
 六祖 慧能禪師
 二レニチナリセ祖ト云一ハナシ
 西天四七 唐土ニ三ト云一ハ西天
 唐土ニ三トハ 唐土ハカラ一ト
 六祖ナリクコナレシ神秀ノ才子
 此方人ニ

ウツイソトバハ町ウタウハ喜拈本非樹 明鏡亦在臺ト云
 シワタウナリ

○六祖ノ一
 初祖達摩大師
 二祖 慧可大師
 三祖 僧璨大師
 四祖 道信禪師
 五祖 弘忍禪師
 六祖 慧能禪師
 二レニチナリセ祖ト云一ハナシ
 西天四七 唐土ニ三ト云一ハ西天
 唐土ニ三トハ 唐土ハカラ一ト
 六祖ナリクコナレシ神秀ノ才子
 此方人ニ

大惠堂見史畧

心息

田中中四ノミシヨグラセバイツクシミルモシモヒ如ル

新刊勿聽子

新刊ハアメラシクバンキシノコトノ一ノ
勿聽子ノ右ノ百ノ名ノ信ナル人ノ明
朝ノ時ノ人

盧國秦越人

盧國ハ盧ノ國ノ人ナル信チロコトス
秦ハシノ
世ノ人ナリ越人ト勿聽子ト同凡九百年
信ニモナル一越人トハ扁鵲カ

教龜峯勿聽子

教龜峯ハ勿聽子
熊ハ右ノ字ノ宗立ハ右ノ勿聽子カ
一又俗解
ト云ハ俗人ニ此註シテ一イカト云ヒゲノコトバ

熊宗立俗解

峯病指南ノ序

七月既望

雨復應翌日

息史迎詩筒束

暇ノ視ノ一乃イ
岷山施君為喜雨作

ト云一ハ

字ハテ
仁顔

秋末白髮

今朝白髮

是道

此二部回ニ毛

此款回ハ
右ノ序ノ本ニ
又ハ
仁
作
仁
也
今
名
今
名

ト唐ナリ、知善ノ人ニ

○折一巻ト云ハ、古冬シズト云ガ、切ハ、今ノ世ニ云ハ、折一ツ

一石ト云クルシカラズ

○弓一張ト云ハ、廿ハ、七張シ一張ト云モノ

○小笠原ノ家ハ、弓馬ニ父シナリシツケノ家ニナシ

○伊波ノ家ハ、ト云ガ、此ニツケノ家ニ

○小笠原ノ家ハ、折朝ノ時カ、此ノ家ニ

○吉田ノ家ハ、ムカシカラナキト云

○應神天皇 ヨリモラフ書ト云ハ、此ニレリト云

○連ヲト云ハ

景行五代メヨリハ、此レリト云他、^{スレシ}仁ナ代トモ云レカレ、此ノ侍ノナレ
シヌト云ハ、此ノ侍ノナレシタル連ヲモアラズムカクトモレリト云ハ、

○應仁ノ家ハ、此ノ侍ノナレシタル連ヲト云ハ、此ニレリト云

○古今新亭 續亭 新續亭

ト云テ古今モ四代アリシカレハ、古今テシアミ
ハ、此ノ侍ノキントウレト云ハ、ツクリハ、此メケルニ
其ノ三度ナカラモキントウレト云レシモ、此ヨラス
アミケルニ、此トモテタルト云ハ、此新續亭ハ
飛鳥ノウケタニナリ、此アミメニフト、今ニテ
百七ナアタルカ

宵

是ハツ子ヲスルモトク日ハ正月一宵シテ

二月

イモシク
日モミナ
ナスロ
ちよ
他カシノ由
日カシノ由
月カシノ由
日カシノ由

三月

七月

他七月系

宵

八月

他八月系

九月

九月

六月

十月

宵

米キヤ
他六月系

三
二
一

ツツクリトメアタカ
他十月系

宵

天
大
小
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

他十一月系

他十一月系

野馬臺

始定讓天本

終臣君周板

谷孫走生羽

填田魚膽翔

孫子動戈葛

昌徽中邦後

寶誌和尚

宗始功元建

祖興和法主

榮成終事衛

世代天工翼

百國氏右輔

初東海姬日為

此婚字八國... 十侍八國... 若字字... 八八... 是... 三... 八... 平... 字... 代... 表... 東...

終空為遂國喧

赤茫茫中鼓

赤起軍青鐘

流盡後棟外

玉英祿大野

百雄星流飛

白尖水寄胡

龍游寢急心城

牛冷食人黃

腸鼠黑代鷄

丹盡後在三

水流天命公

號日本為倭國

一野馬臺詩梁寶誌和尚所作也野馬者陽焰也臺謂國也言^一倭國人道輕薄惟在^二而如^三己猶如陽焰起春卷故指本朝曰野馬臺也昔寶誌和尚行道之日化女忽然來與和俱語給如舊識一女去一女來看此一千八人也皆言其本國之終始和尚怪之以千八人女作文字乃倭字爰知是倭國神也和尚記其語作一十二韻从貽將來矣嗚呼誌公是觀音不知自任和國識乎中古聖武皇帝朝吉備公入唐唐人以其國之識出野馬

臺詩使^一讀焉而為試其智力文字錯平直不書之匪神助不可讀之於是公默祈佛天及本國說神俄而有蛛隨其紙上步曳絲公遂認其跡讀之不謬一字唐人稱焉

東海 本朝后稷之衣田故云姬氏國也而註誤矣
天工 人主代天工民百代政出王者

扶翼 昔神代天兒屋根命天太玉命二人奉天照大神勅為左右扶翼然后神武皇帝東征天下一統彼二神之孫天種子命天富命又為左右扶翼其謂歟

○**衡主** 謂聖德太子衡山惠思禪之後身也推古皇帝朝為

○**本枝** 謂君臣之云聖德孝治之後風雲際會不遠溥天之下率

○**谷填** 魚膾天智白皇子太友作乱有陵谷變回註誤矣

○**終成** 煥終追遠莫善於聖德

○**葛後** 葛謂藤氏也神代天兒屋根命以來為其苗者為枝翼
天根命天智朝中臣鎌子連討惠養押勝作亂之葛後
于交連回註誤矣

○**中微** 押勝以後藤氏不振久矣清和皇帝朝良房公奉
德皇帝之遺詔為攝政忠仁公是也六采子孫連綿

任其職其昌可知矣

○**白龍** 白庚竜辰也白竜孝謙皇帝也言彼女帝庚辰歲
誕生也位注日遙亂無度可削法順道鏡大過矣故
族親誅臣無朝遂失空位不堪其窘急而寄身於
城中以自護矣

○**黃鷄** 指羊荆門也言黃也鷄也荆門已酉歲生火作亂而畧東
八箇國以自稱至是代久食之謂也

○**黑鼠** 謂平相國清盛公也言黑也鼠子也公生於壬子歲大乱若
礼而不奉祭祠食其肉也

○**丹水** 謂天子德澤也安德門右壬道大表作德潤遂洞然政出
詠侯回註誤矣

天命

後鳥羽朝賴朝朝臣討平氏功天下事無大小皆聞於賴朝遂三世全公轉自此後政不復于天子曰註誤矣

百王樣犬

皇以後必有屬甲戌之人而威加四海乎曰註誤矣

星流

星謂庶民也古以星喻庶民言百姓連延國中唯鼓鼓乎
声耳曰註誤矣

七堂ノ堂朱点分七堂ノ

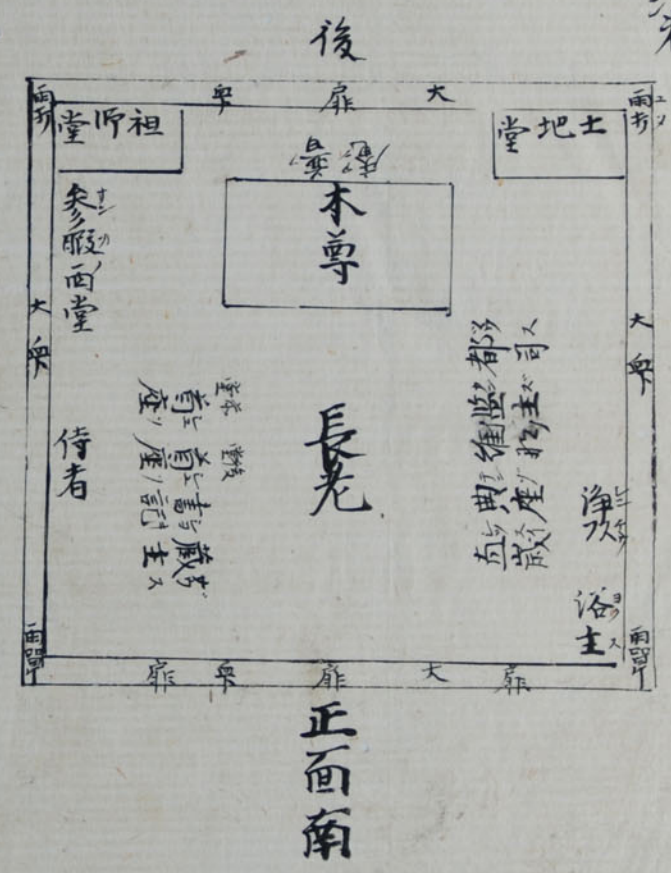


ヨリ又
俗主ト云テ凡品ノ行ノ者ノ

三ノ
字頭ト云テ
四ノ字ノ行ノ者ノ

設山法事座席次第

土地堂ニハ土地ノ鎮守并天部或護伽藍亦或十六善神并設
仏法守護并位牌アリ



東ノ却司ノ座ヲ東班象ト云皆東ノ扉ヨリ入コレ寺ノ公界ヲサハク
 流ナリ寺庭以下ハキヲ元
 本尊ニ弥陀釈迦或虚空蔵等何モ立ルニ定リハ之ニ○長光ヲ
 東堂下之正面ノ扉ヨリ真中ヲ入其寺ノ本住
 祖所堂ニ達摩ヨリ始テ寺ノ開山以下代々ノ祖所ノ位牌
 アリ檀那ノ位牌ハ不置
 西ノ前堂首座ヲハ座元并一座位云皆西ノ扉ヨリ入西班早ト
 ニシテ寺ニ居テ学文シテ居

普庵ハ木像ニモ其給ニキナ木尊ノ後板ガ棚ヲノ推ノモ
 雨打ト雨罩ト漏月底ノ町尾垂トカカシ今ノ大住

二重ヤ子シ雨打ト云又細カ、ト云寺中ノ大阜皆ヨシニ云ク

何トヤシ物チヨリハ其ニツグ、
〇だんちヤシ物トモトモ、
血撥ノヨ、

〇ナスロトシトシスニニニニニニニ
〇ナスロトシトシスニニニニニニニ
〇ナスロトシトシスニニニニニニニ
〇ナスロトシトシスニニニニニニニ

〇ナスロトシトシスニニニニニニニ

身ノタケ 三尺九寸

袖ノメケ 冬尺二寸

袖ノユキ 冬尺三寸

シクビノミナリ 三寸

エリノミナリ 二寸

エリノカサリ 冬尺

〇おくはく ト云モノヤヤヤヤ

〇おくはく ト云モノヤヤヤヤ

〇おくはく ト云モノヤヤヤヤ

〇おくはく ト云モノヤヤヤヤ

〇おくはく ト云モノヤヤヤヤ

〇おくはく ト云モノヤヤヤヤ

〇おくはく ト云モノヤヤヤヤ

〇おくはく ト云モノヤヤヤヤ

〇ナスロトシトシスニニニニニニニ
〇ナスロトシトシスニニニニニニニ
〇ナスロトシトシスニニニニニニニ
〇ナスロトシトシスニニニニニニニ

〇ナスロトシトシスニニニニニニニ
〇ナスロトシトシスニニニニニニニ
〇ナスロトシトシスニニニニニニニ
〇ナスロトシトシスニニニニニニニ

○ナシゲ色ニウルシシツマヤキ

○ウルシヨククコシテ ウルシノ三分ニ 白粉ヲ入ル

ウルシモリシシ一ツ程ニヤシ油シヅノ三分ヲ入ル
又ヨククコシテ付シ

○厚凡セシジ 虫ノクワ又美ヲサ

○ワナギノ 魚ノ皮シホニソベテケブリシノアテヨ

一一年、由、ニウシテ、八交、集ル、ア、其日

一二月、ひ、し、け、の、中、日、と、云

一三月三々

一六月、夕

一七月、夕、由、ナ、カ、ト、云

一九月、の、の、中、日、ト、云

一十月、夕

一十二月、晦

人、凡、人、白、一、年、白、聖、買、ト、ル、一、七、十、五、年、九、イ、リ

徳花集

一雲ノ氣ヲ見ニ其、年、ノ、吾、思、ノ、寸

一^子正月百、日、暮、中、之、八、春、夕、落、也

○正月、南、暮、電、之、八、春、夕、水

○正月、西、暮、電、之、八、秋、夕、水

○正月、水、暮、電、之、八、先、夕、水

一耳、虫、入、先、夕、落、ス、丁

○麩、香、ヲ、是、前、ト、ミ、ノ、油、を、入、ヨ、刻

油、ツ、シ、テ、お、味、を、り

一自、砂、入、先、夕、落、ス、丁

一目^ニ麦入^ルシ^テ治^ス了

○大^ニ麦小^ニ麦心^ニニカセヨ袋^ニ入^レシ^テ其
 け^シ香^ハシ目^シモ其^ハ袋^ニナ^ラソ口
 く^トあ^ハあ^ハ新^キ綿^ニ同^ノ上^ニシ
 ノゴウ^ハシ^レ綿^ニ付^テ出^ルナ^ラシ
 一^ニ大^ニ食^タル^シ治^ス了

○其^ハ兩^ト味^ヲ嗜^シモ^ハ心^ニ付^ト
 ○又^ハ十^ノカ^ブラ^シ所^ヲ付^ト
 我^ハ大^ニ人^シク^ハあ^ハん^ニニ^シテ^ハシ^ラウ^テ
 ト云^ハは^カス^ルカ^ハわ
 一^ニ杯^ニモ^ニ食^タル^シ治^ス了

○あ^ハシ^テ葉^シテ^ハ洗^ハぬ^ル
 ○又^ハび^ヤカ^ウシ^テあ^ハと^ハ茶^ノあ^ハこ
 削^リあ^ハこ^ノ油^ノあ^ハシ^テ用^ス
 一^ニ蛇^ニサ^シ先^シ治^ス了
 ○蜂^ノも^ハ何^セん^ト洗^ハぬ^ル又
 カ^キノ^ハオ^シヤ^テ見^ト白^キけ^テ出^ル其

汁ヲ付こ 又 ナモミノ葉ジメニ出セ
ニケシ付こ

一 湯 かわおろシシ付こ

。 先 塩湯とあね柳シ葉トシ洗

猪油ヲ付こ 又

。 シンジャシシ粉ヲ湯ニ多入テモ煮

洗 湯ヲすすいニモ煮

一 陳 蚊屋ノ了 名匠ニシテ蚊ジメノ了

。 人ノクビヲおろシテ共人ニモ煮

ハシ付こ 湯ニシテ煮

モウノ丸ノ袖ノ糸ヲタニルニシテ洗
瓶ヲ湯ニシテ煮

也ニシテ付 かわおろシシ付こ

糸ニ付シ付 かわおろシシ付こ

糸ニ付シ付 かわおろシシ付こ

は糸シシ付 かわおろシシ付こ

タトシ かわおろシシ付こ

亦有 武野今貝ナヤキンヌ草ノツニモユモシリ

我モユモシリト書テモウノ角糸

付こ 口ノケシテ煮

一 西 足物ノ足シスツニモユモシリ

○ 海針ト云テエイノ奥ノ針ニハ奥生

クニ用其針ヲモテ奥ニハ海生

ノ針ニテハアリノ所ニ

自糸ガ入テ於テ是ニツクク

カクテハ足ノ下ニ於テ東ノ

アノ時ハ西ニツクモ日アル時ハ

中ニ袖ノ下ニツク懐の中ニツク

於テハハ是ノ物通ニテハ針

ニ寸スルハハ針ノ所ニツク

ハ針ニツクハハ針ノ所ニツク

一糸

馬ノハウシ原ヤキテ方寸貝モ

若余ハモテハ息ハ寸寸貝モ

糸ノ目ヲ好む

一盗人

ナニ日ノミツトシテ其家

何ニハハハハハハハハハハ

一人

古キ屋ノ古キ堂寺ノ

ツクテハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハ

終りまて心かろくを甲やうきまぬ
 回し初メ念佛十五のりも終りし
 十層の百々のもて百念ん病ちり
 斗ありし、お香花業湯のり
 江らし犯念カアルへいぬきもし
 人ニ家ナドいお一人ノ屋に
 上の各人の名ヲをそと云キケ念
 たりしはマシニツせぬ人お也テハ
 音由 弟存四王志皆成佛
 そとまて申
 〓

一人アタリ極本ジカシ

〇其本ニキリシジシて穴あかり

ロニ丁ヨシ粉ジメ

一永油ノ

〇ニハトクノ本ノ中ニアル南キエンシツキ出

エノ油シシメテハリトウジニ

ナシテカワラケニ入テトボス

一人ニ号ス

〇丑ニカイルヲ瓦ニテセカカニ思ト云は

シ書ニ從書ノ事ニハアラスクトハ

○キツミ毛。ウサキノ毛。ツヌキノ毛。
 ○ツシ馬思相毛。け毛くしやうツヌイ一羽中
 時 記水ニハくどのツレキリロヨリおん
 白水くしスミハ幸ノスミくしおん又守
 シ書ニハクノカイルシラヌヤラハツシテ
 シ書ニハクノカイルシラヌヤラハツシテ
 馬ニセントウノモロノ書く古キ
 ころあはれ 五輪ノあ場ト火場向
 シキテ馬ノミセツキトウノツシテ
 諸ルハ 諸ルテ申ル時念時ハツラシ

西ノ方諸リテ走包一ツツラクハヒタシ
 ミヤン一ウタカウアヤ

一ケンヤツノ事

○六月百。朝日向テアレタカメレ。ウーシ
 けテ心經三卷 光明真言 亦一返唱テ
 右丸ノ手ノ中シ朝日。向テ右ノ手ニハ
 我名シ書丸ノ手ニハウノ人ノ名シ書ニハ
 千シ合テツカミテそねあ足下ト出ニモ
 我名丸ノ人ノ名シ書テ其おヒヨリカケヨ

一犬ホツカシ又事

○丸ノ手ノ小指く日方ノ大指。見け字

書テ大ニシキカケテ

一馬ノシリクキシノウルキ

。イノ中ヲ三夜メツラセテヤシハカナラヌルシ
一蠟々々ククモヤスサ

。松ヤニ。ニウウ。祢をりらの木ノ白キ

粉 右名未分○是可也。夜シエニノ

油ニ入シキ他等日敷十日計名取出シ

ヨククホシテ又粉ヲ之々々モヘ

ロニヒサリカケヘシ

一ナシ地及ニウルシラハク

。ウルシシイカニモ

三令二百キ物シ入テウルシモクシシ一祀ニ

カミラ油ニツユ中合テ又ヨリわくニ入

考ニシテスルヘシ

一ウラノ虫ノワヌ葉のキ

。ウナキノ魚ノワヌ火ニク合テモ

けつら海あはわてりうふま生るル

ニナ死スルし大キく秘し

一口ウカタヒラクノ仕組のキ

。松ヤニ数種。蠟 天目ニツ油 四ツ

右三種合テ布ニテユシケテ引ヘシ

一馬ノハシタルノ事

。年ノ内ニ賊ト云文字ヲ指シ書位先ニハ
ホツ付テ賊ノ字ヲ書テ馬ニ見スレハ
トスル

一柳葉ノ魚ニ見スル事

。鳥ノカイユノ一死シタルト。テウノ死タルト
ナギノシリキヤノシカケガシラノ魚ノ事
[鳥ノカイユトアルヒヨキ書ヤウ
入ヘシ何事ノ事ゾ定テ遠クニシ

一又一方ニ馬ノ事ハカシトスル

。其日ニ又ノ方ノ事ハカシ指ノサキニズルニテ尤ノ

事ノ事ハ月ト云ハ文字ヲ書テ馬ノ行

。花方ヘモ手ヲ向シハルヤリ
一馬ノムツケタルニシテノ事

。明朋明朋日日
。馬ノヒシテ書ニ

一ツリ茶ワンノ事

。二度
。アウハイ
。春ニ合テルヘシ
是ハニカワノ事

一馬ノキズルノ事

○カツシノ果ヲコ馬ノ頭ノシヤシタルニ
ヒタイノシヲニそげて赤命ニ合テ
もしらぬノけとる合行

一馬ノ色ノ茶ノ下

○馬ノハツノ赤シメ杯ニメ馬ノセリヨク
アラヒテアツキ湯モツテ、付て

一アム方ヨ人ノ身ハ見と成り

○青キカイルエカイル世中ニカハ字ト薬ノ字書

テ救ヌ下ラシ向ニ書テ竹ノ筒ヲ
守示中ニカハトカハ入其人ノ名埋收者也

一又アム方人ノヨビ出と事

○青キカイル竹ノ筒ニ入トビ出と事
人ノ名ノ出書テ其ノ人ノイタル所
居ルハ出と

一アム方人ノ立事

○立ト塩ト赤命ニ合テ立タキ人ノ事也
かりテけチラヨム也

○阿波島のまのひき一にあゆ人
るやちりとと申書の新け身
三五トナヨ

二五目

。其ノ人ノ身物ヲ半キテ半クノノ方
ニハケテ三友唱フ
ト森ノ森ノ聲ノ人ノ声ニ似ル
一水トウジニノ事

。粟ノ花ノ依エノ油ニヒクホシクノ水ニトボ
ス
一ウセ物ヲおまへル事

。ウセ物ノ及シ向ニ書テ五揚シサカサ海母
ウセニテ物ノ下ニけ所シセセテそこ
次シテキテ酒シワカシト五揚ガケテ

一竹ホシコウノ事
。ウセ物イタシタラハ中ノモノナシスベキ
申ユテウテ又ハシヤケトコト出ル

。弓ヲ二丁其日ノサス神ノ方ニシキテ
中ハズニ指ニテ満ハ字ヲ書テそ
心經ニ卷ヨニテそハ人ニ弓シサテ
サス神ノ方(向テハ文ヲ唱フ)
ゼンクワウク九月センクワウ香ノ也香
也香ハ一友ニハ光ノ真言ニツヘシ
弓ノ人ノおろシ口傳アリ我身ハサス神シ
ウシロムケテシ弓ノサキニハ立ヘカラス

かきこもこ之のり

一ホウ腫キシヤラノ事

。人カダシ他ニテウセタル日ノサス神ノイ
リノホシ丸ニ人取ノホウチキニ出シ他
ニ出シカサリ古ノ不動ノ真言シ
ニ持人キヤラノカウキマニ
コトモコトモニハ

。ニムシ針 。

一人面シヘチ見スル事

。五指ナルホシ字ノハクシ丸テ面ニスル

一人ノクヒツ割ニ見スル事

。マノイニツ初メノ血ヲシツクニヨリテ古キ
馬ノクツシツキテ右ノシツクニテ火ツボ
スヘシ

一ツセ物ノ方ヲ知ル事

。子日、未申ノ方有。セ日、酉ノ方有
。刀日、辰戌ノ方有。卯日、辰申有
。巳日、刀未有。午日、子ノ方有
。未日、亥子方有。申日、子戌有
。酉日、午ノ方有。戌日、刀卯有

。亥日。未申有。ひ音ラタツ又ミ

一太刀刀。ツモノ家ノカミシノ取子

。ウレノヨクシシカケテノクウヘシ

一テキノシル方シレ事。キヤノミルヘシ

子 午 卯 酉 十二

巳 未 辰 戌 八

申 酉 巳 亥 四

一善夢見テ

福德增長須旃功德神變玉如來

三反唱テ

東向テ五拜ノ

一悪夢見テ

悪夢滅除須旃光若神及玉如來

三反唱テ

東向テ五拜ノ

一伊勢ノコリノ日

正月 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二

十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 廿一 廿二

一熊野ノコリノ日

正月 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二
十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 廿一 廿二

一凡方日。馬ヲトムル事

。馬ノ中一知ニ賦け空シ書ニテ指ん

一産血ノ多トル時ハ
シンドのシハヤソワカ け文シ三ツ

。アキヤウシセンノ一服
アキヤウトハ 唐ノニカワノ

一産血下ラサル時ハ
。小豆シにテけシハセヨ食ニモス

一産時胎内ニ子ノ死スル時ハ
。名大豆シイリテ酢ニ入テハセヨ又
センシ丸ハ子吉 菊毛症シ
ズノ伸ニテ服 ウキモノトカ

一毒シけ也

。梶シ出テ服
。夜ノ虫ノイノリ
。ハイシ多クニ尿ニ

シメテ持 細末ノクナシノ花シ研セ
ハニソラハ春ニ分テノムハヤヤテ吐
スハハモハ葉シノメヨ

一罨ニ 蛇ノ入タル事

。十五葉ヨリ四ノ法作ノクシヤウ
ウチタノノリカラ茶一ツヲミ
。二吞 心ハヤシトモウ鳥シ
。もあてまひしそヤノそとシ

コウノ名トハコウト云 大キク多シ

一圃出ルマヤリ

。此に造ラバ袋入リてヤウラクトシテ
カク入ルニ鶴ノ毛シク水ニ入テ
セシジシリ湯ニサセヨ 白鶴イヨク言

一圃 臭ノ名ハノ立タラシニジノラマ

鬼 人ニ不可見

一ク子ハミシクワシタラシ

。サ秋ツキシホリテモケジニ香
恋ノ口ニモ付コ又

クスノ根 為子 何也クヤハシ
付コ口又恋ノヒシニ食ス

一馬 食タラシ

。ヤセシマ スコシマ ニワトコ け田
何也クヤハシ付コ 又食ヒラカ言
スリヒラノ事ノニハトコ先ハアハダ
ツ甲也

一命テニサシスルヲ海

。芝塩ヲカミテ付テ 藍ノ葉ヲ

キテ付テ 又方カウノアカシ酢

解テ付テ

一狐きつねのつきたゆゆ

。七月末ニアカ けりげの花

ツク犬ノキバトシ 鼻ノ中ニ

一エズノ妙茶ノ

。大高シ昔酢ニテ 名ヲトシ流

一柳枝カフキ事

ヤウジカキノ名ハ 為モリナド 狂言ニスルナリ

。タトハ柳本ノヤウシ古人ノヤウシハ同ツハセス

常ニハ柳枝ノ葉ニカミタラシ氣中ニ地

スイバツノサキツカシリテ ヲコニシシロ

柳枝ノ内ニカシキヨ 出ルヤウニテ 左ノ手

ツホメテサセハ 右ノ手ニ付ルハ 手ノ内カ

リルニヨリヒトリ け柳枝ガ アカルヤ

ススル時ハヒトリ け柳枝子ニ

ナリ 何レモ一狐ノウツラニ

テツカメ柳枝ニ 寄付メサスル 皆目

一食毒シケス

柳松シカキキシクサノ子シキ
サセリサシナドエテハ各テ子ヲキ
ススシ高産ノ狂言ナカラ下面白
甲ノハ知者ノ人ニシテ今モ
柳松ニテナキハ也ヨシラテ
キキ柳松ノカキキ件ノ柳松
後々ニテスシヨクキドシ

人參ノロス
蠅ノ羽ヲ去テ
人參ノカシラテ
カシラテ丸ジテ湯トシ吞

一四方

青キハイシ生イキカクシクハ丸ヲ捨テ

ゆ浸メ者湯トシ吞

一四方。もみぢくハセムトシ吞

一印音

。クキナシ。スルメ。オシナスヒ

者者シメテ吞

一毒どく寄よッ知しッ

○うらなひのふもふと食たへて足あはら
こあぢあぢのうらなひはくいりあぢり
。すゝい 又ウガシツツのこもて見みこその

あぢあぢのうらなひはくいりあぢり
又ウガシツツのこもて見みこその

○うらなひはくいりあぢり
あぢあぢのうらなひはくいりあぢり
又ウガシツツのこもて見みこその

一ヤやシしキきハはハはハはハは

○ヤやシしキきハはハはハはハは
ツつクくテて一ひとハはハはハはハは
ヤやシしキきハはハはハはハは
ヤやシしキきハはハはハはハは
ヤやシしキきハはハはハはハは
ヤやシしキきハはハはハはハは
ヤやシしキきハはハはハはハは
ヤやシしキきハはハはハはハは
ヤやシしキきハはハはハはハは
ヤやシしキきハはハはハはハは

跡絶十二首ノ言 真モモ

阿さひのけ 又さひもを たあそよ ぶはつと愛つ けのうらら
 阿さひの 又福は愛つ たらこま ぶれこのまよ けさあゆま
 阿さもは 又はつがよの たまうに つけりひの けさあゆま
 阿のそそ 又あれぬの たづま ぶさきまは けさあゆま
 阿さかよ 又よのあは たいふ ぶさきまは けさあゆま
 大げん ともき

阿さひの 又さひもを たあそよ ぶはつと愛つ けのうらら
 阿さひの 又福は愛つ たらこま ぶれこのまよ けさあゆま
 阿さもは 又はつがよの たまうに つけりひの けさあゆま
 阿のそそ 又あれぬの たづま ぶさきまは けさあゆま
 阿さかよ 又よのあは たいふ ぶさきまは けさあゆま
 大げん ともき

阿さひの 又さひもを たあそよ ぶはつと愛つ けのうらら
 阿さひの 又福は愛つ たらこま ぶれこのまよ けさあゆま
 阿さもは 又はつがよの たまうに つけりひの けさあゆま
 阿のそそ 又あれぬの たづま ぶさきまは けさあゆま
 阿さかよ 又よのあは たいふ ぶさきまは けさあゆま
 大げん ともき

鼻ノ下

まのめ見のうとらあまのこまゆ 日月たのめんと

アラハダリニ信ニシ又喜波ニカ合れん

乳ノうとハハ。幅ノと五輪 六の者ナリ

上冠楯ニ信ハ物メの 中ノニ信ハ若ク

月日ノ物メのひさ 一尺ニ寸 二尺ニ寸

乳ニニ信ニテ寸ハ 八寸 日又撞ノ子

日月の物メヨリヨ 事ツスえわ物 幕ノ面ハハ 向て右日ノめえ

Handwritten notes in various directions, including vertical columns and horizontal lines, with some characters written in a cursive style.

○女ハラミタルヲ男ヤツル

・女ノ一ト月水ヨリ先月ト是ラ世トビ

月ト云セノビ月ノ一ト月ト云セノ

米年ト云トトシク云セ入テ是カナ

入タシテ一トニリトニカハニ拾ニテ

百ニテ

川ヲ川ノメテ常ノ時ニサナナリト

時ニ留ミナリトト云セサノ如クも

・女ヤラセ知カト入

之月十三日十六日ト云

元和六年ノムシメツト入

六年ナラハ六ト入
七年ナラハ七ト入

是中ニツ入

合ナセラルモ一リニリト

ノてニと女ナリ是ハナリト

ガテツル一リニリニリカ

まのいさくしり物しては

本ノ丁カオカツル各ト

善書自卷之初進修之史翠若書卷之中卷卷

仙家所教自然述觀入仙家治為本日有改

舊里中七世孫托如傳世人傷之為歎誰不

愛之凡黑白之石名院陽日月取星

目志為九曜言六拾目志一年之口教

整之四方先須孫之州目取之季五音

也其之信不也之南志之天王之守臨盤

之老也中世身之己也二日地世二日

故取之歎南地策之方矣之利和而

先四元地不難欲見歎危疾切教之人

刀迷之活之人叙生死且取目前死病

入促解和時之進為之却成攻入征敵

歎先入城場攻為喻也武之策作

握之內也交勝負也之里之外卷之

武若劍之不亦又男女夫婦之故

媒理之之也之先深以之右行結

蕪文輝之五心腹負感或新之
 華語之升和漢樹之漢之古新也
 越与白卷列忘他念不知有及戒
 級石教生戒監對倫盜戒成由之
 邦嫁戒沈幼高諸戒其名打碎送
 飲内戒何冠也共皆押前打早於
 正一為迷基三界地悟基十百之也
 心之程其基各持不奇心章之也道
 の程以法理也申部引引即述上手
 下子法依打乱基却生之也之結
 緣正下與之取以切德善在也
 一切我之也之也皆基合成佛道

性ツクノ居し丁

金 キネ

皮 ヒ

燒 ツキ

礮 カネ

梅 ウメ

子干丑未

白 シロ

灯 チ

壽 ス

杵 キ

鴉 カラス

寅申卯酉

炎 ヒ

地 チ

樹 キ

鐘 カネ

雨 アメ

戌亥辰巳

判形は傳し丁

一ニ三四五六七八九

此は字のワビニ大小フトソホソク
書テ判シスニカ吉

夕上ハ判ノスヤウハ

五

此ハ一ニ三付ノ字也
初ニキトシテ三付
トシテ人ヲハ長
第一ニ一ニ
ニ付クニ三付
トシテ人ヲハ長
初ニキトシテ三付
トシテ人ヲハ長

〇凡そ

又日や今糸法の送 日本 大念寺し松本権表ノ此ナリ
アリシニ七月ノ此ナリ

〇凡そ

是ノ手には此ナリ
此ナリ

〇見知事

いぎのばりしるごのりうれとをほわあ〜んゆのかをも丸
た、知事：由文守基ノ秘蔵の所、来カクを丸き全
か命とてお同心ナキニげ知事ッ、いッとお同心ノト

〇五付句

神に似たり杖のし〜ら

千岩や守佛の夕子なり

〇若国益寿久一代益し高在徳と云ふ方、苗一ノ代を以

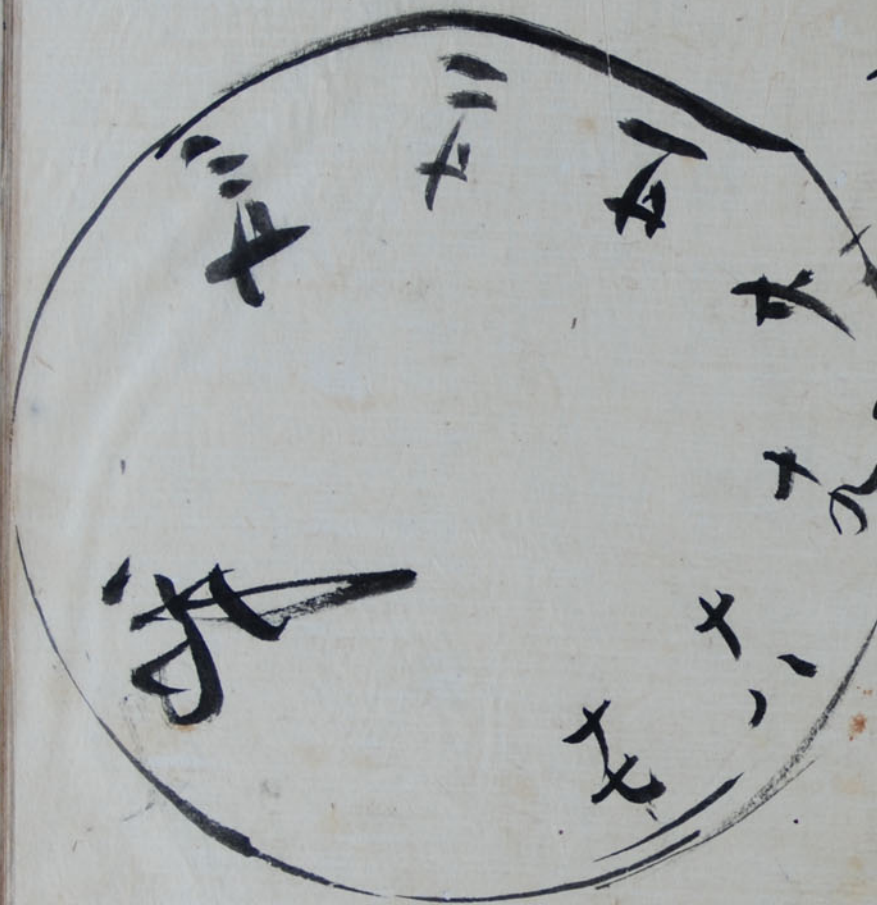
ル崎ヶノ木を連テ見テ、京ノ院中ノ玄仲と云ふ

人、入道ニシテ、今も拾月此の寺なる

。お〜〜〜人々を御もかき、月と云ふ

いとうとがれめ古え〜〜し、益寿久代

一十七人といひ、た〜〜



○ ぬえー月の事

○ 廿三年ヨリ クリ物ルに正月と七月に十三ノ人
廿二ノ月 廿三ノ月 廿四ノ月 廿五ノ月 廿六ノ月 廿七ノ月 廿八ノ月 廿九ノ月 三十ノ月
たどて

○ 十三(正月) 子死月

十四(崩) 母死月

十六(増) 兩死月

十七(朔)

十八(二朔)

十九(三朔)

十九ヨリ 又正月、是より二十、二月亦一、三月、四月、五月、六月、七月、八月、九月、十月、十一月、十二月、

カキノツニリルルヨリ モトルナルベシ

○ アルサ

○ まはる人かひらん後芽を移すやと音病と云
け身心は君の心は也日人の心と云ひて
人ノナキニて是メ何して又何テ見テ
初めのタル時病のあらはラシテ人
心はたまたまとも人かひらん後芽を
移すやと音病と云ひて
移すやと音病と云ひて
移すやと音病と云ひて

○平家と俊者人救い事

●小原のいさゝの御

●又行くは平

●ちやうやんは平

●ちんせいのに ふか

●あまをどり

●うゑ乃せん

○けきよ

そいこの ま 珠のた

カシノ 平 ト 平
●可ん寺 ふか

●南大御言

是 平家 ノ 言 ヲ 依 ル 依 ル 依 ル

●あまの侍

是 平家 ノ 大 ノ 哀 ノ 言 ヲ 依 ル 依 ル 依 ル

平家と俊者人救い事

○平家の忠臣

○平家と俊者人救い事
○平家の忠臣

○平家の忠臣

○平家の忠臣

○平家の忠臣

○かゝるまきの西まきり

○七種（鳥生）あつてはげのむせせかんあつたあつた

○よまがいのよ

○子（子）六九の宣（宣）ナツ卯辰戌モメツ

巳未（巳未）六つとを（とを）ナツ亥（亥）七の酉（酉）十の申（申）八の

たの言（たの言）たんと孫（孫）ハメツハセ七日（七日）

なり秋（秋）はけり計（計）もみつめとりよ（とりよ）子丑寅卯

辰（辰）とろてお辰（辰）の言（言）はらしておむめ

う（う）何（何）はけ心（心）午申（午申）まてし日（日）はじ世（世）の日の

○かゝるまきの西まきり

石（石）はホのむせせかんあつたあつた

一ツツ（一ツツ）ハメツハセ七日（七日）

ア（ア）はホのむせせかんあつたあつた

十六（十六）新（新）のむせせかんあつたあつた

一（一）と二（二）新（新）のむせせかんあつたあつた

十四（十四）と一（一）十九（十九）新（新）のむせせかんあつたあつた

大（大）二（二）と一（一）新（新）のむせせかんあつたあつた

○かゝるまきの西まきり

十三（十三）と一（一）十九（十九）新（新）のむせせかんあつたあつた

大（大）二（二）と一（一）新（新）のむせせかんあつたあつた

三十佛

一日定光佛テモウ 二日燃燈佛エントウ 三日多寶佛タホウ
 四日阿閼佛アミツ 五日弥勒佛ミツク 六日十方燈明佛トウミョウ
 七日三尊燈佛サンソン 八日藥師藥師ヤクシヤクシ 九日大通智勝佛トウツクシヤク
 十日燈心佛トウシン 十一日觀世音菩薩クワンゼン 十二日難勝佛ナンショウ
 十三日寶蓋佛ホウガイ 十四日普賢菩薩フケン 十五日阿旃陀佛アケンダ
 十六日地持佛ヂチ 十七日龍樹佛リウジュ 十八日正觀音テイクワン

十九日光佛ニチリク 廿日月之壽ツキノクワメノス 廿一日无量壽ムゲンノス
 廿二日施無憂佛セムウ 廿三日執持壽テツチノス 廿四日地藏ジヤク
 廿五日文殊モンジュ 廿六日藥上壽ヤクジョウノス 廿七日妙吉祥ミョウキヤウ
 廿八日不動フドウ 廿九日藥王壽ヤクオウノス 卅日救世藥クセイヤク

○月水留く御符

佛 明明明

はがし書テツ成にニツ成に切テ丸シテ
 早天ノ水ノ物ツ法テ朝日向テ香へし作
 口傳去ラテラシキワラセウリツ人ガリテ
 朝日向テノミテ列ノモ人此也
 列クジヨシニホラサゲケラニモトシ

○後イハキ日斗

初ニ六六中ノ四五ハ地氣ノ日七九毎日後迄ハ

はがし書ニ六六モ月ノ言ハクテゾカサ四八ハ月中ノ十言ハ
 十ツゾ地氣ノ日七九モ地氣ノ人日ノ故ゾ七九ハ
 七九ハ六六ノ上ニケリ日ノ四ハモト也

○山アム人ニ作

○大徳代徳書

○山一處ノ作トヤシトモトツ

○こゝにツボノアヒル山ニ於テタノモナシケテ

ハノノミカハノ海ノモトニツボノモナシケテ

三宿ノルニツボノ入ケルモモナシケテ

多んどの志ノミカハノモナシケテ

上高 杯勝共のりツボノモナシケテ

よりちら本儀ニツボノモナシケテ

はくはちをモナシケテ

あふだ我由ニツボノモナシケテ

ナセバ四宿ヲガカシモナシケテ

千一 幸ひとてかきとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千二 後にはいふべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千三 田のあふふにみちをわきとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千四 也ゆりてとてしるべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千五 作里多や 之の由余 ちこしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千六 ありよみぬ 存しるべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千七 ちかしのいふべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千八 ちかしのいふべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千九 作 だまはるべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千十 ちかしのいふべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千十一 未にはいふべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千十二 強のちかしのいふべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千十三 ちかしのいふべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千十四 ちかしのいふべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千十五 ちかしのいふべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千十六 ちかしのいふべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千十七 ちかしのいふべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千十八 ちかしのいふべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千十九 ちかしのいふべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし
 千二十 ちかしのいふべしとてしるべしとてしるべしとてしるべし

げんきぎりの河部とられて下路のか上へ

阿武のまゝ入を為すまゝなりまを

てより命して書命をよむにあらぬ

右に河部信基八十箇ノ其の傍と元年のヨリ元和

又年の中し長野曲部七四下代中村に書命をとり

其のつれ三方衣ニキレル人としホ六人下代

連判所付七人ノ衣付の 福井を松村を 長 孫を

福野中村を 伊豆を 松本を 八ツツエの石を けせんこ はれ連

あらんめうのあゝの備ニのあ、川在七人づい

やわかち村とや分たてく三ノ云オのあむし

ゆりら地力たう治あまゆノ竹藪とつらう

いとまゝとび人じり 治郎の將軍のふらと

上あゝあまを、七年八月申白に三言衣出入

らひし 江戸ノ將軍のあま子たはりや

の上あゝ未治よりゆゑ人ともてゝあむ

先ノ申下を治めテ 岡中いたのこんこまをまを

めまけげと号、こまをゆめたがかなむ色や

こまよりすくやだ、あまを 下代ニ

中たむをすくや、あまをのつこまを

かしてすかおぶキノほろろい〜とゆひぬを
 五ノ ちやや母文ノ巻終のノ事 由文ノ
 ちやあつてお文ノ巻終由文ノお上人あつ
 つわつていししね七人とあつて三言十余人
 出入あつてあつてまわりのり〜と案の
 ね七人〜と案のり〜と案のり〜と案のり
 一して舎介り〜と案のり〜と案のり
 わり〜と案のり〜と案のり〜と案のり
 め〜と案のり〜と案のり〜と案のり
 此ノ〜と案のり〜と案のり〜と案のり

~~~~~

。産所イカミヤス〜ト産スル 芥ノ事 二七

。祝あつて男〜と案のり〜と案のり せん經

二讀

。内文一巻ノ巻終の守書 手トミ人女

。寺アリトゆい梅作にもあつて何寺ともしつて

七ノ巻の由文ノつらげん坊トトの家振のくし守書

守書 梅ヤ〜と案のり〜と案のり 諸のつら南

ヨキ寺もつらげん坊〜と案のり〜と案のり  
 寺のい〜と案のり〜と案のり だの〜と案のり〜と案のり

予何しぬお家まわらわて身まふくねま

○京。經シヤ。一四録ヲスリミテラルニウレズヤウクテトクハ

。煙<sup>キヤシ</sup>トバのわめお録よりくくー<sup>シ</sup>は<sup>ガ</sup>河<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>げ<sup>ハ</sup>ち<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>丸<sup>ハ</sup>祭<sup>ハ</sup>作<sup>ハ</sup>

。右<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>ヲ見<sup>テ</sup>

福德增長須旃功德<sup>トク</sup>神變玉架<sup>ニ</sup> 三反唱<sup>ニ</sup>東<sup>ニ</sup>  
向<sup>テ</sup>五拜<sup>メ</sup>

○立性<sup>ニ</sup>清<sup>ク</sup>向<sup>テ</sup>言<sup>フ</sup>

|     |   |
|-----|---|
| 正月  | 午 |
| 二月  | 酉 |
| 三月  | 子 |
| 四月  | 酉 |
| 五月  | 子 |
| 六月  | 卯 |
| 七月  | 未 |
| 八月  | 卯 |
| 九月  | 午 |
| 十月  | 酉 |
| 十一月 | 卯 |
| 十二月 | 午 |

天疾病得心秘事

千金莫傳密法

ヤミ

キタイフシギノ符

〇〇〇〇圓口口〇〇〇〇加律令

右是ハ朱ニテ書

九九八十〇〇〇〇〇〇〇〇

右是ハ黒ニテ書

右はニツノ符シ欲疾病時書

又の海ズー日又室内に

又病人に生死ヲ

は符ヲ先朱シ何書テ後

モツテ書テ

符ニ清ムヲ入テ

ニツノ符ヲ入テ十面

を仁十進唱へて見ルニ死スベキ

朱ノ符先沈ミ一生ハ黒シ

存先ヅツ況ム一死生を立たけ申余

ヲレトイハレけ存ニ一ス申ふ有之

右みぎに存まゐる吉倫大臣入唐ノ時

相あひま待まちシ今いまハ日ひ和わニテ相あひま待まちス

○せんちんがうまうと云まアナルシニヒナラフ

ち此こゝニイノ和わニテ居ゐる四方ノすすニハ決けつシ

ニテせんちん入いル其年そのとし中なか虫むしノ多おほク

●傷やまを瘡かさ或ある温ぬる病びょう物ものの擧あげ病びょう也なりトハヤリノ

御ご前ぜんノ物もの

鬼おに鬼おに鬼おに鬼おに

○南無牛頭天王なむぎゅうとうてんわう菩薩ぼさつ民たみ將來しやうらい之の孫まご也なり噫あやと如ごと禮らい合ごう

鬼おに鬼おに鬼おに鬼おに鬼おに

無む

又また世上よこしまノ傷やまをハヤリノ方かた我われ家いへ出いル方かた日ひ病びょうをカシメル

けけニニトトナナトトナナトトナナ

○南無天形星なむてんぎやうせいせいトトナナトトナナ



○ 聖<sup>ミヤコ</sup> 一年ニ事<sup>トシ</sup>ニ度

○ 二月十日 寅<sup>ウラ</sup>時<sup>トキ</sup>未<sup>ミ</sup>時<sup>トキ</sup>十六日 牛<sup>ウシ</sup>刻<sup>カ</sup>飯<sup>イハ</sup>

○ 卯<sup>ウ</sup>時<sup>トキ</sup>卯<sup>ウ</sup>時<sup>トキ</sup>巳<sup>シ</sup>時<sup>トキ</sup>飯<sup>イハ</sup>

○ 七月十日 卯<sup>ウ</sup>時<sup>トキ</sup>未<sup>ミ</sup>時<sup>トキ</sup>午<sup>ヌ</sup>時<sup>トキ</sup>飯<sup>イハ</sup>

○ 八月十日 辰<sup>チ</sup>時<sup>トキ</sup>未<sup>ミ</sup>時<sup>トキ</sup>巳<sup>シ</sup>時<sup>トキ</sup>飯<sup>イハ</sup>

○ 九月十日 未<sup>ミ</sup>時<sup>トキ</sup>申<sup>シ</sup>時<sup>トキ</sup>飯<sup>イハ</sup>

○ 十二月亦日 未<sup>ミ</sup>時<sup>トキ</sup>申<sup>シ</sup>時<sup>トキ</sup>酉<sup>ウ</sup>時<sup>トキ</sup>一日 卯<sup>ウ</sup>時<sup>トキ</sup>飯<sup>イハ</sup>

けけ<sup>ケ</sup>ロ<sup>ロ</sup>言<sup>コト</sup>テ<sup>ト</sup>き<sup>キ</sup>と<sup>ト</sup>わ<sup>ワ</sup>ま<sup>マ</sup>け<sup>ケ</sup>言<sup>コト</sup>一<sup>ヒト</sup>言<sup>コト</sup>

○ せんあんのう

ちんあんのうのまのめいけりて他もあつていふ事  
我うハ三方<sup>ミタタ</sup>反<sup>サカサマ</sup>事<sup>コト</sup>ありま<sup>マ</sup>一<sup>ヒト</sup>事<sup>コト</sup>び<sup>ビ</sup>た<sup>タ</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>なり  
ち<sup>チ</sup>タ<sup>タ</sup>三<sup>ミ</sup>事<sup>コト</sup>ト<sup>ト</sup>ハ<sup>ハ</sup>テ<sup>テ</sup>一<sup>ヒト</sup>二<sup>ニ</sup>三<sup>ミ</sup>四<sup>ヨ</sup>五<sup>イ</sup>六<sup>ロ</sup>七<sup>シ</sup>八<sup>ハチ</sup>九<sup>ク</sup>十<sup>ジュ</sup>三<sup>ミ</sup>ク<sup>ク</sup>ト<sup>ト</sup>シ  
他<sup>タ</sup>も<sup>モ</sup>し<sup>シ</sup>け<sup>ケ</sup>ス<sup>ス</sup>テ<sup>テ</sup>た<sup>タ</sup>一<sup>ヒト</sup>方<sup>カタ</sup>ありて<sup>テ</sup>ア<sup>ア</sup>んと

○ 神佛<sup>カミブツ</sup>子<sup>コ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>事<sup>コト</sup>の<sup>ノ</sup>う<sup>ウ</sup> ○ ち<sup>チ</sup>あ<sup>ア</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>の<sup>ノ</sup>か<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>

一 ち<sup>チ</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>なり

二 ち<sup>チ</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>なり

三 ち<sup>チ</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>なり

四 ち<sup>チ</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>なり

又<sup>マタ</sup>ち<sup>チ</sup>の<sup>ノ</sup>事<sup>コト</sup>なり

六 考にじあつて  
七 あつての山を  
八 うつての山を  
九 心うつての山

いもむのす

一 ちとこたり  
二 何とあつて  
三 何とあつて  
四 あつて  
五 あつて  
六 あつて  
七 あつて

八 あつて  
九 あつて

行人のす

一 ちとこたり  
二 何とあつて  
三 何とあつて  
四 あつて  
五 あつて  
六 あつて  
七 あつて  
八 あつて  
九 あつて

ゆめのす

六 考にじあつて  
七 あつての山を  
八 うつての山を  
九 心うつての山

いもむのす

一 ちとこたり  
二 何とあつて  
三 何とあつて  
四 あつて  
五 あつて  
六 あつて  
七 あつて

八 あつて  
九 あつて

行人のす

一 ちとこたり  
二 何とあつて  
三 何とあつて  
四 あつて  
五 あつて  
六 あつて  
七 あつて  
八 あつて  
九 あつて

ゆめのす

- 一 ちりびり
- 二 目かき
- 三 津佛
- 四 ふすま
- 五 ちり
- 六 ちり
- 七 ちり
- 八 ちり
- 九 ちり

- 一 ちり
- 二 ちり
- 三 ちり
- 四 ちり
- 五 ちり
- 六 ちり
- 七 ちり
- 八 ちり
- 九 ちり

あまのこゝろ

菊乃口地水火月庫

返并口今月今日

りり

あま

今

生死 棚頭 傀儡

一線 斬時

あまのこゝろ

あま

今

あま

一休判

け書元和九年  
 日耳塔ノ下ノ地神廟六ツ中ニモト  
 〇備木寺 善羽ノ石橋上ニのちニ七午六通アリ  
 地ヨリうんかんノ木ナシ 糸乃丸陶ニ尺ナリ

一 木を木ニシテ大なりしを年々入るものぞ  
 け書わびし人ノ佛ノ心ヲ  
 一 付く 水と己

〇  
 一 木を木ニシテ大なりしを年々入るものぞ  
 け書わびし人ノ佛ノ心ヲ  
 一 付く 水と己

恙のちももはゆる人事も何海にを  
 乃羽存よたし美せい海にすせ侍もよ  
 日おんくもろくをならめは  
 きーの物まの世をあらん  
 目なりざりしころはわかろも  
 押みか人道のころはわかろも  
 子共たしはゆるあは父母もふさ  
 侍せんの我身を何老としん  
 何とてしる事の中は  
 今んていもさすいもの  
 だんこしり跡をいせり

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

かき草子  
かき草子  
かき草子

けいてい  
たこり  
アサ  
モ  
マ

なりこのやちいほり時又色の鬼念  
うやかりてうすそほきううて又  
みそいて人の神よなりてさやん  
しんのかりに行ちわいむてき又家  
そのいよきおく危く身んどもさか  
たのいしつんのみまいたを佛もあん  
ほかりともほいん乃ちあきりてあか  
えん海の帳子はきあひ  
くわい葉すゆふ地獄りかきくす  
鬼とて老をくえんたり一代を経て  
百人回行て海をくえんたりたり

ゆのちやあや色くうをばけいし  
かきわをたうとくしうか北と諸  
やちか山乃神よ行も一佛成る親  
見法り草本國去ちつかい海舟本  
も佛より佛のわんをんをいかに  
しんそじわくあつたとあか  
阿三随とて交佛りやて浮る火志か  
うそ成法わいせうも舞の法の釋  
柳をまり花をくま井阿たま  
妻れりまわ

水鏡

中未生花...  
 混地...  
 父母未生...  
 佛法...  
 佛...  
 一切...

死...  
 有...

け...  
 く...

名...

是...  
 死...

而...

且...

ありまぐさくはくしんばやみさく  
らりあを我たり

すゑきりかたし松月のおと  
死あおこころしくたしあはや後

まゝいさうくたしちたやかん  
けりて来た

あつきの三もおとせひるの木のた  
あつきの道元

あつきの道元  
あつきの道元

あつきの道元  
あつきの道元

あつきの道元  
あつきの道元

あつきの道元  
あつきの道元

あつきの道元  
あつきの道元

あつきの道元  
あつきの道元

あつきの道元  
あつきの道元



なほにりしをうしなせぬの  
て死をわが我もの人の志か  
池もつわが身を人生はうすは  
りて入

報せとの佛のうらなはあは  
ころのうしなしたはあは  
あはうわし人も我身もそのも  
りてあはりぬあは  
うしなせぬ人もあは  
うしなせぬ人もあは

事子すあはせぬあは  
あはせぬあはせぬあは  
あはせぬあはせぬあは  
あはせぬあはせぬあは

二人の足

あはせぬあはせぬあは  
あはせぬあはせぬあは  
あはせぬあはせぬあは  
あはせぬあはせぬあは  
あはせぬあはせぬあは  
あはせぬあはせぬあは  
あはせぬあはせぬあは  
あはせぬあはせぬあは

下らりて依りて遠能くもつて心故に  
 是れ志のあらはれしは 一人て侍り  
 又所のもつたのこころは人にも  
 きていひの老く人きかかへん中のふ  
 ここのこころ中へそを生れ物血  
 乃根源とす所をたするお執念  
 身念ふらたころて是のこころ世間  
 ちやまはれぬ心成ひる人せし又佛り  
 善する移人をまはせしこころ心志  
 妙行侍りたこころまはれぬこころり

吾人の心志のこころりて心志  
 ざら一切のおぼれもたかひりて善法  
 みありて心志はたかひりて一切の  
 移人をまはせたり地の命とすりて心  
 地獄りて心志人なりて心志  
 了る心志はたかひりて心志  
 善する心志はたかひりて心志  
 心志もつた人なりて心志  
 だちて天上りて心志はたかひりて心志  
 心志もつた心志はたかひりて心志  
 心志もつた心志はたかひりて心志





此一事何の事か  
 かりきり一はふりさあし昔今の飛と  
 かりてなふよあふる  
 向一侍もいふるはるる中い  
 善一侍もいふるはるる中い  
 ありてもいふるはるる中い  
 中一と生きたるはるる中い  
 す侍のちりあふるはるる中い  
 眼の見耳のさふるはるる中い  
 一とあふるはるる中い

此一事何の事か  
 かりきり一はふりさあし昔今の飛と  
 かりてなふよあふる  
 向一侍もいふるはるる中い  
 善一侍もいふるはるる中い  
 ありてもいふるはるる中い  
 中一と生きたるはるる中い  
 す侍のちりあふるはるる中い  
 眼の見耳のさふるはるる中い  
 一とあふるはるる中い

中をり

何れも春入つてくるとは  
 毎日も春入つてくるとは  
 けしきよの心細もつてあふくじりき  
 こころよのこころいの色は侍もさだ  
 春のこころのこころのこころの尊  
 本のみつたのこころのこころの尊  
 何れも侍もく出あまきく侍もをさ  
 けり人や  
 春入つてくるとは侍もをさ  
 けり人や

おきことなり候をさく衣は侍も  
 こけりもさく衣をさく衣の侍も  
 何れも侍もく出あまきく侍もをさ  
 けり人や  
 春入つてくるとは侍もをさ  
 けり人や  
 春入つてくるとは侍もをさ  
 けり人や  
 春入つてくるとは侍もをさ  
 けり人や

神家のつゆなすくくあは人のい  
 くかひのそまをりてし身老いた  
 めて一経とよみたてゆぶらん包も  
 なるういよ人の二丈と経たにや  
 をててあつすただこか心の深は  
 りよりあたくし一停志もやうとたを  
 け包しけあつうう内そ亡者のこい  
 かに包をくく一停しをけゆ包と  
 停く一切の佛火を生とくまあね  
 むらぶるあつう

又いよりの停のいとすすけけは身家  
 のもあ絶も迫まのいひは老のまじ  
 ひててこんろはかこま一大事入  
 停のいよてまをけの中包から  
 くる停く人の死一經をかくらうり  
 たりんわ  
 答て一丈のたをらてく一人のたを  
 一の地水火風をく一人のを体てま  
 けをけまのいよて停まを風木の  
 あつてけを包を火木のうれけいひの  
 あつて水たけけまをくく一人のま

有りては力よきおとをばすのせし  
 してやまはるのまゝに大なる也  
 すよと家の時をりりしにさる者  
 ころんまはるの眼にりしものゆ  
 ころして昔後たりたふはたし  
 よいそそり

有りしものを待たしむる世のわら

志のあはれいよはいとをりおん

是と不老不死のまをりしや  
 向てま待たしむる世の佛法は

心も待てく佛法を流すはとを  
 佛法をみらぬまをりし我のこ  
 やるなりいこと待たしむる  
 志のあはれいよはいとをりおん  
 さると火をいよと凡とを高生  
 此を佛たりし思はれおのり  
 中よとちりし今時人しぬよ  
 待たしむるまをりし凡とを  
 かりしやまをりしはるの  
 ころして昔の佛をる世をた



佛と大光の死三味言を伊い又ま  
 えんの高神より式々々深うさび又  
 りんら片又ひんりひりひりもひり  
 りんがし又因魂のえちり一切の又ひら  
 あは物やをいあやとりひり  
 ソろりらあは物やをいあやとりひり  
 生るるはめりひりひり  
 のるる物から今時の人けりひり  
 一とひりひりひりひり  
 りんらとておは命を皆ひりひりす

りんらとておは命を皆ひりひりす  
 りんらとておは命を皆ひりひりす  
 りんらとておは命を皆ひりひりす  
 りんらとておは命を皆ひりひりす  
 りんらとておは命を皆ひりひりす  
 りんらとておは命を皆ひりひりす  
 りんらとておは命を皆ひりひりす  
 りんらとておは命を皆ひりひりす  
 りんらとておは命を皆ひりひりす  
 りんらとておは命を皆ひりひりす

只中ふらふらとあつた人ふたりの如く  
 二人の言を伴ふはゆゆの  
 是はさうめんふらふらとあつた  
 て中ふらふらとあつた  
 をの所へ中ふらふらとあつた  
 女々女の如くはゆゆと  
 し心をも交はさるるはゆゆとあつた  
 欲の中その言を伴ふはゆゆとあつた  
 とく中ふらふらとあつた

吾女人と佛をうけあつたはゆゆとあつた  
 女々女の如くはゆゆとあつた  
 男も口もなまならず是れゆゆとあつた  
 ろの力もあつたはゆゆとあつた  
 女々女の如くはゆゆとあつた  
 男も口もなまならず是れゆゆとあつた  
 ろの力もあつたはゆゆとあつた  
 女々女の如くはゆゆとあつた  
 男も口もなまならず是れゆゆとあつた  
 ろの力もあつたはゆゆとあつた

〇下  
2

ひそそとの用事いふしあきししては  
 を毎つれ出してゆきやくし文字  
 をいふて口伝送子うも信をた  
 くの口よりふりえりうらあへの心  
 たりるを佛信も又ひきも今  
 時信と心かをわく其さやうの  
 交つものりらうゆはくとして  
 佛の信海女のいふ利のたあは羅  
 とくく佛神とての事くまの心  
 ことあ信を佛の信心のあふ  
 信子のあひのいふ信してきひ  
 けしりるまことあんとて佛信  
 としきまを志のいふ神三社のい  
 たりこのあせりも信をてりし  
 うんはくしてらんあちの三のいふ  
 是よりくして地勸いあふなりたの  
 を三社のいふことありて信を  
 まんとをひらふ志んとて信くち  
 とを志願のまをり佛信はあす  
 して信三のいふことありて信を  
 かり今の母の人の礼とあてをいふ  
 佛神のあひとしてし事のまをり



四で侍りしとて大なる名書あり佛  
 又十年の尚記は志の教ありし佛の  
 せん火きわて佛方ねしお記のし福  
 よろぬまて一字をもちてことと定む  
 て一枝の花をりて大なる力をこ  
 めめし果業おる者もさしついでに  
 といひれはけりむ

善てらしし佛又十年の尚記をた  
 せし子と侍りかたしはるゆゑに  
 是子のうらよ物のあるとて侍りて道  
 て侍りしとて

手をあやしてしお記は世をわたりし  
 言傳とて佛の佛のせしきもはしるは  
 のほをたてしお記は世をわたりし  
 けりぬをまてしお記は世をわたりて  
 こしきもはしるは世をわたりし  
 して佛のしるは世をわたりし  
 一しお記は世をわたりし  
 向ししお記は世をわたりし佛  
 あけのし花とてせりしとてし  
 侍りしとてしお記は世をわたりし  
 侍りしとてしお記は世をわたりし佛

けあかざりの色かよひ花をこも三世伝  
 法佛の世り出て一葉の法光のありとも  
 けいふの侍をなかり天竺の二十八夜  
 のふそりりかこつ大まや作しをいとも  
 ぢり一ちまや作しをいとも世間人のま  
 らまやと一ちまやしりれまらりし一ち  
 りまやの田舎のりかまの田舎とをいめ  
 深ぢり心の深とを唐之のいしなは  
 めぢりしこまのいしなはぢりかまの田舎を  
 つぢりし深ぢりたぢりまや作しをいとも  
 りれりしこまのいしなはぢりかまの田舎を

だはのいしなはぢりかまの田舎を  
 人か一ちの田舎法をいとも作し  
 ぢりまやと一ちまやしりれまらりし一ち  
 佛法はぢりしこまのいしなはぢりかまの田舎を

傷用尸池水虫同定  
 返奇ヤ今月今日

無端純保

かりまき一ちのいしなはぢりかまの田舎を  
 本来床まうぞぢりかまのいしなはぢりかまの田舎を

生死玄来 棚頭 傀儡

けいふの侍をなかり天竺の二十八夜  
 のふそりりかこつ大まや作しをいとも

一線 斬付 落合 石碓



○此の終るべきまじき所なりと云りて  
いふ

△此の終るべきまじき所なりと云りて

○此の終るべきまじき所なりと云りて  
いふ

又此の終るべきまじき所なりと云りて

○此の終るべきまじき所なりと云りて

甲一文字ありて

○此の終るべきまじき所なりと云りて

○月日多しなりと云りて

○此の終るべきまじき所なりと云りて

○此の終るべきまじき所なりと云りて

○此の終るべきまじき所なりと云りて

○此の終るべきまじき所なりと云りて

○此の終るべきまじき所なりと云りて

○此の終るべきまじき所なりと云りて

○此の終るべきまじき所なりと云りて

○此の終るべきまじき所なりと云りて

○此の終るべきまじき所なりと云りて



三つらびいのゝ人の目未は心の鬼はせり  
 四大とそ地水火風の念は是つ必付て念をきり  
 又祈とも今を所地はきりぬれは盗念の  
 六佛はせり念をきりぬれは盗念の  
 七つぎの佛はきりぬれは盗念の  
 八つんの法はきりぬれは盗念の  
 九つんの法はきりぬれは盗念の  
 十とそ念はきりぬれは盗念の

何の跡まらぬ身  
 一モノキキキキキ  
 一モノキキキキキ

天下之ニシテ長老百首之所ニテ

詠物ナリ 何事ヲだらむ

春の心  
 春の心  
 春の心

子日

花の56

酒つきて花をよ初寝はせし昔は小ねの心は  
花の

春毎にこそよ物なごめ目こぼれ  
花の

花の

業ハ初よ花の心は花の心は  
花の  
花の  
花の

花の

花の心は花の心は花の心は  
花の

花の

花の心は花の心は花の心は  
花の

花の

花の心は花の心は花の心は  
花の

花の心は花の心は花の心は  
花の

柳

樹にやりの春の風は三月のまをたなはは柳

早蕨

足ははやくもあたらしく座す成上の花の春の早蕨

桜

桜の遠山も花はふさふさかく志日とりや中食

厚

花はふさふさかくはるす後地はあつちや甲の合

春雨

雲の雨はあつちかひか道はあつちあつちかひ

春の

毛の足は物なはる春の油壺（はがら）のたのこ

吹子

吹子の音はあつちあつちとあつちあつちあつちあつち

苗代

草

捨たる物は、今も田代苗代節冠とて入る

茶畑草をいふは、草の又の由は、草の草

は、草の又の由は、草の草

杉石

水でとくは、この水、火かき、水は、いふも、世に、いふも

水でとくは、この水、火かき、水は、いふも、世に、いふも

花冠

海より、花冠、志、す、何、か、いふ、も、世に、いふも

野冬

川上、山、吹、と、む、け、は、け、り、若、及、子、け、け、け、け、け、け

三月書

春日、祭、の、長、持、の、た、と、藤、と、は、二、三、斗、合、け、り、つ、つ、

藤、葉、の、長、持、石、つ、つ、と、三、月、ノ、名、跡、も、も、い、か、多、く、わ、か、り、し、た、ら、ん、と、い、ふ、事、也、こ、こ、

申文

免、か、申、上、ら、る、二、つ、つ、と、い、ふ、事、也、こ、こ、い、ふ、事、也、こ、こ、い、ふ、事、也、こ、こ、

御守の色河の丁をみるわとるおひる

# 卯花

月影を此言角之卯の花の東志る三六和ふなり

# 菱

御中娘作とびの地うらた刀足こをぬめん

ここの地うらた刀足こをぬめんと有念

# 時鳥

新葉のうらた刀足こをぬめんと有念

# 苜蓿

ここの地うらた刀足こをぬめんと有念

# 早田

ここの地うらた刀足こをぬめんと有念

# 照村

移いせをせるととるこ面見原の村

# 五日取

みりぬまのて感光あつたひら

盧橘

禁をのぞく木を以て福を風を以て橘を以て

南野ノ村庭禁乃想命と今家法師ノ業經の書  
みちくしり神よのこころのこころ

虫

虫のちひさしき虫はまはるる虫はあつた

蚊を火

家よりわき蚊をたたくも天をぬるる蚊は

蓮

蓮の花は白く咲きつる花は佛の心なり

氷室

今日も氷室の雪もなげけは清き水なり

雪は人ふはく人のこころを清くするなり  
やがて雪は融けぬ

泉

花

花は春を告ぐも風は秋を告ぐ

花は春を告ぐも風は秋を告ぐ  
定規を以て花は秋を告ぐ  
花は春を告ぐも風は秋を告ぐ

夏和種

る

今日のまゆ半蚊帳のまゆ方々をいせしる  
こゝろをいせしる乃能ふかき

立秋

立秋のあはれなるもく風や秋のくちかきこころ  
あきのは

七夕

盆舟にて聖良海はなまよひしる時々の  
あき  
尾の川水

秋

今ま秋はりのこころ我れ秋の秋と  
あき

女郎花

あはれなき男のまゆかきまよひしる秋の夕月  
あき

あはれなき女をいせしる秋の尾を  
あき

秋草

あはれなき女をいせしる秋の尾を  
あき

南

蘭もぢらきつとるをぞすそ節はぢらきつ

さうらうさすはそそのはよりあしは若殿の  
おう節はあしはの節はあしはあしはあしは

### 萩

新は今もやあしはあしはあしはあしはあしは

古はあしはあしはあしはあしはあしはあしは

### 鷹

小志はあしはあしはあしはあしはあしはあしは

小志はあしはあしはあしはあしはあしはあしは

### 麻

持分のもあしはあしはあしはあしはあしはあしは

### 萩

萩の柳はあしはあしはあしはあしはあしはあしは

### 号

別寄はあしはあしはあしはあしはあしはあしは

### 模

花のあしはあしはあしはあしはあしはあしはあしは

わさくが



菊

をれ為川のあれ枝さきいであそはるるはるら菊

丸りたるくかゆや夫人の杖毎の房飾月きの葉子

持衣

百姓のよもはひのさかひのほらら伊勢あわれ

出

まじり

もとのさかひのさかひのほらら伊勢あわれ

4

菊

はあゆみのほらら菊は只ひらけ花の香です

例明の玉弘の伝承りてとて然てゆらゆらけ菊は  
正作のさかひをさかひの産者すかあり

紅葉

紅葉がせてはるら紅葉とて先枝同よまけて

九月畫

帆の具はあさおびと月はこほりて下せり

大小

初冬

偽のまじりては月ひのけは氷の身はこまじりて

雪鳥の山あり

風と時ぬ小侍の底のまじりては氷の身はこまじりて

慈覚和尚ノテラフ中意ノ人海をわたりては小僧ノ底と  
有ノ山ノ底をうんかりり人比ノ底をわたりては

霜

ふりりてさゆり氷のまじりては氷の身はこまじりて

あられ 雪

あられはけり餅のまじりては氷の身はこまじりて

雪

かさねては教の花をまじりては氷の身はこまじりて  
あられはけり餅のまじりては氷の身はこまじりて

寒うさ道

ふりりては氷のまじりては氷の身はこまじりて

千鳥

あられはけり餅のまじりては氷の身はこまじりて



埋方

一箇の中物のまをり埋方から後方の前へ流る

除和

鬼の福袋(外)出たら午のころに流るやどをいふ

初並

新よ恋心は海に流るあつたまをいふ  
初並

中並

井の中は流るるあつたまをいふ  
中並

下並

新よ拍子まにあつたまをいふ  
下並

物並

志づきいひまをいふあつたまをいふ  
物並

打朝並

あつたまのあつたまをいふ昔はあつたまをいふ  
打朝並

追石並

一和あつたまをいふあつたまをいふ  
追石並

依戀

接合と又詠合のゆゑにたゞてなめりて道一十人

思

恋の母語にえんごころかたむすぶかたむすぶ

是れは恋のむすぶをいふことなり  
言碎の時の夏もやとをいふことなり

行

ひんがしのかたむすぶのむすぶはあ人のむすぶ

恨

かたむすぶのむすぶはあ人のむすぶ

まのすぶがむすぶ村のむすぶはあ人のむすぶ  
かたむすぶはあ人のむすぶはあ人のむすぶ

暖

今日きてゆつた地かく跡勸堂をいふはあ人のむすぶ

松

松立の松のむすぶはあ人のむすぶ

竹

竹乃もみれと回わるとも高野を救う樹のつぎ  
 詰 かたが  
 だつと

吾のわがをさしむらばて若むと  
 山

針 な  
 川 が

がーとまはしめおはるも志をて死やむ桂川

和文浦や垣止此のさすもはるるがて回病志矢  
 野 の

坊主たらは家野ゆゑ志矢野田通た能く経を  
 用 の

ぬい目かゝる中折れり成條よたがさぬのさらの  
 格 の  
 用守

まきうらちうらちのまき成観するふかひは此  
 格 の

かんらん 海海

元朝子元がらんを九かたにけりらん海海に多人と  
悉の山に此およせといふと海海より子月かたり  
紙(回) 瓢箪草はうりたゆかぬと

様

草枕飯まよりまで推まのまをま物まにまをま  
昔の精

別

立別世存をこの祥もさうらん法田枕云人のま

山家

山入ヲしモアリ  
やまのりたのり

世にまかたひらひら同におもひもくのみらん

懐旧

あうぢうごいごいあうぢうごいを死ませよと  
山母信毎入らまじらぬを物と  
巾を道うお清く  
何れかせん

号

かたむねのまゝにまゐるゝ若し

化蝶前の身存まゝにまゝに命をせよとて白きにまゝに  
こゝろまゝに心をおぼえ...

# 常

一字あらまゝに

死ぬるゝもあまのまゝにたゞし

# 迷懐

ちかばゆ國くになる二三の長ながり神かみはあまのまゝ

# 祝

あつれをむくかあまの代々天下泰平國土

あんこ

あまの代々天下泰平國土

けしあまのまゝにまゝにまゝにまゝに

上人まゝにまゝにまゝにまゝに

長尾州中守あまのまゝにまゝに

けしあまのまゝにまゝにまゝにまゝに





實山  
十持也

のさあげてもあひの... 養は... 坊會... 音... 月...  
あひ... 坊會... 音... 月...  
たの... 坊會... 音... 月...  
坊... 音... 月...  
あひ... 坊會... 音... 月...

ツウヤンノ...  
何ク... 坊... 音... 月...  
ア世...  
ツウヤンノ...  
何ク... 坊... 音... 月...  
ア世...  
ツウヤンノ...  
何ク... 坊... 音... 月...  
ア世...

病ツケ...

●梅ノ... 坊... 音... 月...  
坊... 音... 月...  
坊... 音... 月...

坊の子つげ... 坊... 音... 月...  
坊... 音... 月...  
坊... 音... 月...

坊... 音... 月...  
坊... 音... 月...  
坊... 音... 月...

か... 坊... 音... 月...  
坊... 音... 月...  
坊... 音... 月...





